色葬

前編

その日、世界から色が一つ消えた。

世界感情エネルギー開発機構、通称『WEEDO』の納情施設。

白や青で構成された室内は、どこまでも均質で、どこまでも無機質でありながら、不思議と圧迫感を伴わない空間だった。壁も床も天井も汚れ一つ存在しておらず、光源の位置すら曖昧で、影という概念さえ希薄にしてしまうその部屋では、そこに立つ人間の存在すら『要素の一つ』として処理されているかのようだった。その中央に据えられているのは、感情を抽出しエネルギーへと変換するための装置―納情装置であり、この世界において最も合理的で、最も正しいとされている工程の終着点でもある。

感情を人間から抽出する機械であり、効率も安全性も証明されている以上、この行為に疑問を差し挟む余地はない。十八歳になったら行われる当然の行為なのだから。

ここで問われるべきものは何もなく、あるのはただ、決められた手順と、その結果だけだった。

「準備はよろしいですか」

発せられた言葉は確認ではなく、手順の一部に過ぎない。そこに個人的な意図や感情は含まれておらず、ただ工程を進めるために必要な音として処理される。

ロータスは椅子に腰掛けたまま、わずかに首を縦に動かした。「はい」と答える声にも抑揚はなく、それは肯定の意思というよりも、入力に対する適切な応答に近い。

直後、複数の端子が身体へと接続されていく。皮膚に触れる冷たい感触は確かに存在していたが、それを不快と認識する理由はなく、視界の端に映る数値の変動もまた、ただの情報として処理されていく。心拍、脳波、感情強度、色相分布――すべてが正常範囲内に収まっており、むしろ理想的とさえ言える状態だった。

「では、開始します」

静かな機械音とともに装置が稼働を始めた瞬間、ロータスの内側で何かがわずかにずれていく。

痛みではないし、苦しみでもない。ただ、自分の中にあったはずのものが輪郭を失い、境界を曖昧にしながら、静かに剥がれ落ちていくような感覚だった。

思い出が流れていく。幼い頃の記憶や、誰かと交わした言葉、その時に抱いたはずの感情は、今や色として抽出され、意味を持たないエネルギーへと変換されていく。淡いものから順に、抵抗もなく、ただ自然に。まるで最初から存在していなかったかのように、痕跡すら残さず消えていく。

その過程の中で、ロータスは確かに何かを思った。しかしそれが何であったのかを理解する前に、その思考自体が意味を失い、空白として処理されてしまう。疑問は生まれない。生まれる前に消える。

透明な管の中を流れる色がゆっくりと揺らめいている。赤や青や黄が混ざり合い、ほどけ、また交差するその様は、本来であれば不安定で制御困難な状態であるはずだったが、ロータスから抽出されるそれは比較的安定しており、大きな乱れも抵抗も見られなかった。優秀な個体――その評価

は、この時点でほぼ確定していた。

やがて、すべての工程が終了する。「納情、完了しました」という機械的な報告とともに装置は停止し、ロータスはゆっくりと目を開ける。視界に映る白い空間は変わらず、身体の状態にも異常はなく、思考も明瞭で、すべてが正常に機能していた。

「気分に問題はありませんか」

「ありません」

即答だった。不安も不快も疑問も存在しない以上、その回答は当然であり、そこに付け加えるべき言葉もない。

そのとき、ロータスの視線がわずかに横へと逸れる。まだ完全に処理されていない感情の残滓が、透明な管の中でわずかに揺らいでいた。規定上問題のない範囲であり、すぐに回収され、均される運命にあるそれを見た瞬間、ロータスの中に一つの認識が浮かぶ。

（……綺麗）

その感覚がどこから来たものなのかは分からないし、そもそも綺麗という評価はこの場において何の意味も持たないはずだった。それでも、その言葉は確かに存在した。

「貴方は廃人化の兆候も見られません。非常に稀なケースです。適性試験を実施した後、職員としての配属が検討されます」

告げられた内容を、ロータスはそのまま受け入れる。「了解しました」と短く返し、指示に従って部屋を後にする。その歩みは迷いなく、判断も感情も介在していない。提示された最適解を実行する、それだけだった。

通されたのは別の区画だった。白で統一された構造は変わらないが、そこには複数の端末と簡素な椅子が並べられており、同様の工程を終えた人間が数名、無言で座っている。互いに視線を合わせることもなく、ただ指示を待っているその姿は、個としての差異をほとんど感じさせなかった。

適性試験は簡潔だった。提示される情報を正確に処理し、最適な判断を選択する。それだけの工程が繰り返される。倫理や感情を問う設問は存在せず、すべてが効率と結果に基づいている。ロータスはそのすべてに対し、遅滞なく、誤差なく応答した。迷いはなく、躊躇もない。選択は常に最適であり、そこに個人的な意思が入り込む余地はなかった。

やがて試験は終了し、結果が即座に提示される。「高適性個体。感情制御安定。廃人化リスク低」と簡潔にまとめられた評価は、そのまま次の処遇へと直結した。

「貴方をWEEDO職員として採用します。配属は最終感情処理場。詳細は追って通達されます」

「承知致しました」

それは選択ではなく、決定だった。ロータスはそれを受け入れ、与えられた制服に袖を通す。鏡に映る自分の姿を一瞬だけ視認するが、そこに特別な感想は浮かばない。ただ機能として適切な状態であるかを確認し、問題がないことを認識する。

そのまま案内に従い、施設の奥へと進んでいく。すれ違う職員たちは皆、同じように無機質で、同じように無駄がなく、同じように完成されていた。そこに個性はなく、感情もなく、あるのはただ役割だけだった。

それが、この世界の正しさだった。

――そのはずだった。

配属先へと向かう途中、ロータスの思考の奥底に、ほんのわずかな引っかかりが残っていることに気づく。それは先ほど見た、処理される前の感情の残滓――混ざり合い、揺らめいていたあの色の記憶だった。

理由は分からない。必要もない。それは評価にも影響せず、行動を変えるほどのものでもない。

それでも、その像は消えなかった。

均される前の、不完全なままの色。

非効率で、無駄で、不要なはずのもの。

それが、なぜか思考の片隅に残り続けている。

ロータスはそれを異常として処理することも、問題として報告することもなく、ただ無視すべき情報として扱うことを選択する。そうすることが最も合理的であり、最も正しい対応だったからだ。

だがその選択とは裏腹に、その微細な誤差は確かに存在し続けていた。

測定されることもなく、記録されることもなく、ただ静かに。

それはまだ形を持たない、極めて小さなものだった。

◇　◇　◇

ロータスがWEEDO職員として勤務を始めてから４年の歳月が経過した。

現在の担当箇所である最終感情処理場は、あらゆる意味で均質だった。

温度、湿度、光量は常に一定に保たれ、人間が長時間作業を行うことを前提としながらも、快適さや不快さといった主観的な感覚が入り込む余地はない。その空間の中央には、納情工程で抽出された感情の残滓を再調整し、エネルギーとして利用可能な状態へと変換するための装置群が整然と

並び、搬入から処理、安定化に至るまでの一連の流れは、例外なく再現され続けていた。

ロータスはその一角に立ち、搬入されてくる対象を確認する。透明な容器の中で揺らめく色は、すでに個としての意味を失い、ただの情報として存在している。赤や青や黄が境界を持たずに混ざり合い、絶えず形を変え続けるその様は、本来であれば不安定で制御困難な状態であるはずだったが、この工程においては処理すべき対象として明確に定義されていた。

「処理対象、感情残滓レベル高。通常ラインでの安定化困難と判断」という報告に対し、ロータスは視線だけで応じ、「こちらで引き取ります」と短く告げる。その動作は無駄なく、判断も即時であり、そこに迷いや逡巡は存在しない。

端末に表示される数値は基準値を大きく上回っているが、処理可能な範囲内に収まっている以上、それは問題ではない。ロータスは装置に手をかざし、「処理を開始します」と告げると同時に、制御フィールドが起動し、ばらばらに拡散していた色がゆっくりと収束を始める。

混濁した感情は段階的に均され、不要な揺らぎが削ぎ落とされていく。

その過程は常に一定であり、結果もまた例外なく安定している。色はやがて単一の状態へと近づき、エネルギーとして扱いやすい形へと変換される。それが正しい処理であり、正しい結果だった。

それでも、完全に均される直前の状態に対して、ロータスの視線はわずかに留まる。混ざり合い、揺らめき、まだ形を保っているその不安定な色は、規定上もっとも非効率で、速やかに解消されるべきものとして扱われているにもかかわらず、なぜか思考を引き寄せる。理由は定義されていない。

定義されていない以上、それは問題として扱われることもなく、ただ不要な情報として処理されるべきものだった。ロータスはその認識を切り捨て、装置の処理が完了するのを確認する。「処理完了」という機械音声が響き、数値はすべて基準内に収まる。問題はない。すべては正常だ。

次の処理対象が搬入される。工程は繰り返され、同じ手順、同じ結果が積み重なっていく。変化はなく、変化の必要もない。それがこの世界の“正しさ”であり、そこに疑問を挟む余地は存在し

ないはずだった。

異常は、その連続の中で発生した。

警告音は鳴らなかった。

数値の逸脱もない。

ただ、装置の応答がほんの僅かに遅れた。それだけのことだった。しかし、その遅延は制御フィールドの収束に影響を与え、均されるはずの色が一瞬だけ広がる。混濁した感情の残滓が処理の枠を逸脱し、膨張するように歪んだ瞬間、ロータスは即座に手動制御へ移行しようと端末へと手を伸ばす。

その瞬間、視界が『色』に覆われた。

赤が弾け、青が沈み、黄が揺らぎ、緑が滲む。それらは単なる色ではなく、意味を持たないはずの情報が意味を伴って流れ込んでくる感覚だった。熱のようなもの、冷たさのようなもの、圧迫されるような感覚と、同時に解放されるような感覚が、輪郭を持たないまま一斉に押し寄せる。理解するよりも先に、それは体験として内部に侵入してくる。

装置の安全機構が作動し、強制収束が開始される。膨張した感情は急速に圧縮され、数値は正常範囲へと引き戻されていくが、その一部は完全には回収されず、ロータスの内側に残留する。胸の奥にわずかな圧迫感が生まれ、呼吸のリズムが僅かに乱れ、視界の焦点が定まらない。それは痛みでも故障でもない。それでも今までとは明確に違った。

やがて装置は停止し、「処理完了」という報告が淡々と告げられる。外部的には何一つ問題は残っていない。ログは回収され、異常の原因は解析に回される。それで終わるはずの事象だった。

だが、ロータスはその場に立ったまま動かない。

思考が途切れずに続いている。先ほど流れ込んできた『何か』が、完全には消えていないことを認識している。それはエラーでもノイズでもなく、既存のどの分類にも当てはまらない。定義できない以上、本来であれば切り捨てられるべき情報だった。

それでも、それは残っている。

胸の奥に、わずかな違和感として。

形は曖昧で、言語化もできないが、確かに存在している。

「ロータス、状態を報告してください」という声に対し、「問題ありません。処理は完了しています」と応答する。その内容は事実であり、報告としては十分だった。会話はそれで終わり、次の処理が始まる。工程は変わらない。手順も変わらない。世界は何一つ変化していない。

変わっているのは、内側だけだった。

ロータスは再び装置へと向き直り、新たな処理対象を確認する。透明な容器の中で揺らめく色は、これまでと同じはずだった。しかし、その見え方はわずかに変化していた。以前よりも鮮明で、以前よりも強く、思考に引っかかる。

理由は分からない。分からないままで問題はない。それでも、その分からなさは消えなかった。

それは、異常だった。

だが同時に、それは切り捨てきれないものでもあった。

◇　◇　◇

その少女は、特異な存在だった。

通常、人間の瞳の色は幼少期に変化を始め、五歳前後にはある程度の傾向が確定する。色相は感情の偏りを示し、彩度はエネルギー量を、明度は純度を表す。それはこの世界において極めて重要な指標であり、個体の価値や用途を決定する上で不可欠な要素でもあった。

しかし、少女にはそれが存在しなかった。

白。

どの色にも属さない、何も示さないはずの色が、十歳を過ぎてもなお維持されている。

例外。あるいは、異常。

提示された資料には最低限の情報しか記載されていなかったが、それで十分だった。識別番号、年齢、経過観察記録、そして瞳の色――白。その一行だけで、この個体が通常の管理体系から外れ

た存在であることは明らかであり、同時に、扱いを誤ればシステム全体に影響を与えかねない未定義の要素であることも理解できた。

「次のLI-6891の教育担当の適任者として、ロータスを推薦します」

その通達に対して、ロータスは特別な反応を示さない。役割が与えられ、それを遂行するという前提は変わらず、そこに個人的な意思が入り込む余地はない。理由としては十分に合理的だった。年齢が比較的近いこと、精神状態が安定していること、そして廃人化していない希少な個体であること。それらはすべて数値として評価可能であり、選定基準として適切だった。

「了解しました」

その返答に迷いはなく、判断は即時に確定する。

指定された区画は、通常の処理エリアとは明確に隔離されていた。構造自体は同様に無機質でありながら、その中心には一枚の大きなガラス壁が設けられており、空間は内と外に分断されてい

る。その透明な境界は物理的には絶対的な隔たりでありながら、視覚的にはほとんど存在を主張しないため、そこにある距離だけが強調される設計だった。

ロータスはその手前で足を止め、ガラス越しに内部の様子を確認する。

少女は、そこにいた。

年齢相応の体格で、特別な拘束や補助装置も見当たらない。白で統一された空間の中に静かに座っているその姿は、資料に記されていた異常性と一致しないほどに普通であり、むしろ意図的にそう見せているのではないかと疑う余地すらあった。

しかし、その疑念は、視線が交差した瞬間に消える。

少女の瞳は、完全な白だった。濁りも混色もなく、何も映していないかのように見えながら、逆に『何も持たない状態が維持されている』という不自然さを伴っている。その視線は対象を評価することも、拒絶することもなく、ただまっすぐに向けられているにもかかわらず、なぜか意識を強

く引き留める力を持っていた。

少女は一瞬だけこちらを見つめ、すぐに立ち上がると、躊躇なくガラスへと駆け寄る。その動作には距離を測るための間が存在せず、初対面であるという前提そのものが欠落しているかのようだった。両手を透明な壁に押し当て、まるでそこに隔たりが存在しないかのように顔を近づける。

「ねぇ、あなた」

声が届く。遮音処理が施されているはずの構造でありながら、この区画では最低限の対話が可能な設計になっていることを思い出す。

「新しい人？」

その問いには、純粋な興味だけが含まれていた。警戒も、遠慮も、意図的な探りも存在せず、ただ知りたいという単一の衝動が、そのまま言葉として出力されている。

ロータスは一瞬だけ沈黙し、その発話の意図を分類しようとする。しかし、それは既存のどのカテゴリにも完全には当てはまらない。必要な情報を得るための質問というよりも、対象そのものに対する関心が直接的に表出している状態であり、その形式はこれまでの職務上で経験したものとは異質だった。

「はい。　本日よりLI-6891さんの教育担当として配属されました、ロータスです」

最終的に、事実をそのまま返すことを選択する。それが最も誤差の少ない応答だった。

「きょういく……？」

少女はその言葉を繰り返し、わずかに首を傾げる。その仕草は計算されたものではなく、理解が追いついていない状態をそのまま反映した反応だった。

「あなたがここで過ごす上で必要な知識や行動を指導する役割です」

「ふーん……」

完全に理解した様子ではなかったが、少女は納得したように頷く。その判断には明確な論理が見えないにもかかわらず、迷いはない。その在り方自体が、ロータスにとっては説明のつかないものだった。

そして、次の瞬間、少女はまるで思いついたかのように表情を変える。

「じゃあさ、いっぱいお話ししてくれる？」

その言葉はあまりにも自然に発せられ、要求としては曖昧でありながら、そこに含まれる意図は明確だった。教育という枠組みの中で優先されるべき内容ではなく、効率の観点から見れば不要に近い行為であるにもかかわらず、その言葉には拒絶を前提としない強さがあった。

ロータスは即座に否定しなかった。否定すべき理由は存在する。だが、それを選択するための動機が、わずかに曖昧になる。

処理場で感じた、あの微細な違和感が思考の奥で再び揺らぐ。

理由は定義できない。定義できない以上、それは判断基準として適切ではない。それでも、その不明瞭な要素が応答に影響を与えていることを、ロータスは認識していた。

「……必要に応じて」

結果として出た言葉は曖昧だった。本来であれば避けるべき不確定な応答でありながら、その場においてはそれ以上に適切な表現が見つからなかった。

「ほんと？やった」

ふふ、と少女は小さく笑みを浮かべる。その反応は即時で、抑制もなく、言葉と感情が直接結びついているように見える。

その瞬間、ロータスの内側で何かがわずかに揺れる。それは先の事故で生じた残留物と同質であ

りながら、今回は外部から流入したものではなく、内部で発生しているという点で決定的に異なっていた。

胸の奥に生じる微細な変化。形は曖昧で、言語化もできず、分類もできない。それでも、それは確かに存在している。

ロータスはその現象に対して評価を下さない。評価するための基準が存在しないからではなく、まだその対象が何であるか確定していないからだった。

ガラス壁越しにこちらを見つめる白い瞳。その視線は何も含んでいないはずでありながら、なぜか強く意識に残る。ロータスはわずかに視線を逸らす。それはこれまでにない動作であり、明確な理由を伴わない選択だった。

その小さな変化に対して、意味付けは行われない。

この少女は、他の人間とは異なる。

そして、その異なりは、無視できる範囲には収まっていなかった。

◇　◇　◇

教育という名目で割り当てられた時間の中で、ロータスは少女に対して基礎的な知識や行動規範を教えることを求められていた。言語、認識、判断、そして最低限の社会的な振る舞い。それらは本来、個体が自律的に獲得していくべき要素であり、この施設においては効率的に付与されるべきものとして扱われている。

だが、実際に行われているやり取りは、その目的からわずかに逸脱していた。

少女は指示された内容を理解する速度が極めて早く、与えられた情報をそのまま受け入れること

に対してほとんど抵抗を示さない。理解できない概念に対しても、それを拒否するのではなく、そのまま保持しようとする傾向があり、その柔軟性は通常の個体とは明確に異なっていた。

しかし、それ以上に顕著だったのは、少女が学習以外の時間を求めることだった。

「ねぇロータス、これってさ、どうしてこうなるの？」

それは指導内容に関連していることもあれば、まったく関係のないこともある。問いの形式は似ていても、その内側にある動機は一様ではなく、純粋な疑問である場合もあれば、ただ会話を継続するためだけに発せられているようにも見えた。

ロータスはその都度、可能な限り正確な説明を返す。原因と結果、構造と仕組み、論理的な接続。それらを整理し、無駄のない形で提示することは職務の一部であり、そこに特別な負荷はない。

それでも、説明を終えた後、少女が示す反応は予測からわずかに外れていた。

「そっかぁ……なんか、すごいね」

その言葉には具体性がなく、評価としても曖昧でありながら、どこか満足したような響きを持っている。理解の深度と一致しているとは限らず、むしろ理解したことそのものに対して反応しているようにも見える。

ロータスはその反応を分析しようとするが、明確な基準が存在しないため、結論には至らない。ただ一つ確かなのは、そのやり取りが繰り返されるたびに、思考の中にわずかな変化が蓄積されていくという事実だった。

時間は均等に配分されているはずだった。

教育に割り当てられた時間は正確に管理されており、開始と終了は厳密に定義されている。ロータス自身もその枠組みを逸脱することはなく、常に規定通りに行動している。

それにもかかわらず、その時間の体感は一定ではなかった。

ある時は極めて短く感じられ、ある時はわずかに長く引き延ばされたように感じられる。その差異は数値としては存在せず、あくまで主観的なものであるため、本来であれば無視されるべき情報だった。

だが、その感覚は繰り返し発生していた。

「ねぇ、ロータス」

ある日の終わり際、少女がガラス越しにこちらを見ながら声をかける。その視線は以前と変わらずまっすぐで、そこに含まれる情報は依然として解析しきれない。

「また明日も来る？」

その問いは、これまでのどの質問とも異なる性質を持っていた。知識を求めるものでも、仕組みを理解するためのものでもなく、未来に対する確認――あるいは、期待に近いものとして発せられている。

ロータスは一瞬だけ応答を保留する。

来るかどうかは決定事項であり、確認する必要のない内容だった。スケジュールはすでに確定しており、そこに不確定要素は存在しない。

それでも、その問いに対して即答しないという選択が生じる。

「はい。明日も同時刻に訪問します」

「ほんと？よかった」

少女は安心したように小さく息をつき、そのままガラスに手を当てる。その仕草は特別な意味を持たないはずでありながら、どこかで接触を試みているようにも見える。

その様子を見ながら、ロータスの内側で再び何かが揺れる。

それは事故の際に流入した感情の残滓とも、最初に抱いた違和感とも異なり、より安定した形で存在していた。突発的なものではなく、継続的に積み重なった結果として形成されている。

その変化は緩やかで、明確な境界を持たない。気づかないまま通過してしまうことも可能なほど微細でありながら、確実に以前とは違う状態へと移行している。

（……守りたい）

その言葉が、ふと浮かぶ。

それはこれまでの思考体系には存在しなかった概念だった。対象を維持する、管理する、保存する――それらに近い意味を持ちながらも、完全には一致しない。

対象はこの少女であると、即座に理解する。

なぜその対象が選ばれたのかは、論理的に説明できない。だが、その認識は自然に成立してい

た。

ロータスはその思考を否定しない。

否定するための根拠が見つからないからではなく、それを誤りと断定するだけの材料が不足していた。

ガラス越しに手を当てたまま、こちらを見る白い瞳。

その中には何も映っていないはずでありながら、確かにこちらを捉えている。

その関係は依然として定義されていない。

教育担当と被験体。

それが公式な関係性であり、それ以上でもそれ以下でもない。

だが、その枠組みだけでは説明できない何かが、確実にそこに存在していた。

そしてその『何か』は、静かに、しかし確実に蓄積され続けていた。

◇　◇　◇

教育担当になっても、最終感情処理場における業務はこれまで通り行っていた。搬入される感情の残滓を確認し、数値に基づいて処理方法を選択し、安定したエネルギーへと変換する。その一連

の工程は常に一定であり、再現性が保証されている以上、そこに揺らぎが生じる余地はないはずだった。

だが、その日はわずかに条件が異なっていた。

搬入された対象は、通常の範囲を超える強度を持っていた。混濁率も高く、複数の感情が複雑に絡み合った状態で維持されており、安定化には通常よりも時間を要することが予測される。端末に表示される数値はすべてその状態を裏付けており、処理難度は明確に『高』と分類されていた。

それでも、それはあくまで処理対象であり、対応手順が存在する以上、問題として扱う必要はない。

ロータスは装置に手をかざし、通常通り処理を開始する。制御フィールドが展開され、ばらばらに拡散していた色がゆっくりと収束を始める。赤が滲み、青が沈み、黄が揺らぐ。その変化は規則的であり、段階的に安定へと向かっていくはずだった。

その途中で、わずかな抵抗が生じた。

本来であれば連続的に進行するはずの変化が、ほんの一瞬だけ足踏みをするように止まる。その原因は数値上では明確に特定できない程度の微細なものであり、処理結果に影響を及ぼすほどのものではない。

それでも、そのわずかな遅れは視覚的にははっきりと認識できる形で現れていた。

色が、形を保ったまま揺れている。

均される前の、不完全な状態。まだ何かを内包しているような、途中の段階。その不安定さは本来であれば排除されるべきものであり、処理工程の中では価値を持たないはずのものだった。ロータスはその状態を注視する。単なる確認のためではなく、思考がそこに引き留められていることを自覚しながら。

次の瞬間、その色に含まれている情報が、断片的に知覚される。

言語として整理されるほど明確ではないが、それでも単なる視覚情報ではない何かが、感覚として流れ込んでくる。何か……恐らく感情を失う直前の緊張、手放すことへの抵抗、あるいはそれを受け入れざるを得ない状況に対する鈍い諦め。

それらは個別の意味を持たないまま、重なり合い、混ざり合いながら存在していた。

装置は処理を継続する。制御フィールドの出力が強まり、揺らいでいた色は徐々に押し固められていく。境界は整理され、混濁は削除され、やがて単一の状態へと近づいていく。

それは正しい処理であり、想定された結果に向かっている。その過程を見ながら、ロータスの思考に一つの像が思考の中に浮かぶ。

ガラス越しにこちらを見つめる、あの少女の姿。

白い瞳。何も持たないはずの色。その中に、明確な感情の偏りは存在しないにもかかわらず、確かにこちらを捉えている視線。その像は、目の前で処理されている感情と自然に重なっていく。

処理対象となっているこれらの感情は、もともと『誰かの内側に存在していたもの』であり、今はただの資源として扱われている。抽出され、分解され、均され、エネルギーとして再利用される。その流れは一貫しており、そこに例外は存在しない。

そして、その工程の先にある結果もまた、すでに理解されている。

納情を終えた個体は、感情の大半を失い、活動性を著しく低下させる。思考は鈍り、意思は希薄になり、自発的な行動はほとんど見られなくなる。それはこの施設において繰り返し観測されてきた事実であり、特別なものではない。

つまり、あの少女もいずれは同じ過程を辿る。

瞳が白色のまま納情を行った例は今までにない為、詳細は不明であるがそれでも実行はされるだろう。

その認識は、これまでであれば何の抵抗もなく受け入れられるはずのものだった。個体は資源であり、全体の最適化のために利用される。それは合理的であり、必要不可欠な構造であり、否定する理由は存在しない。

しかし、その結論を思考の中でなぞった瞬間、明確な不整合が生じる。それは違和感という曖昧なものではなく、もっと直接的で、はっきりとした『拒否』に近い反応だった。思考の流れが、その一点で止まる。

受け入れるという選択が、成立しない。

ロータスはその状態を客観的に捉えようとする。これは判断なのか、それとも一時的な誤作動なのか。既存の枠組みに当てはめて分類しようとするが、適合する項目が見つからない。理由は導き

出せないし、論理的な裏付けも提示できないが、それでもその結論だけは変わらない。

あの少女が、この工程に組み込まれる――その未来だけは、許容できない。

装置は最終段階に入り、色は完全に均されて単一のエネルギーへと変換された。数値は正常範囲に収まり、感情の処理は問題なく完了した。

すべては正しく行われた。

……だが、その結果に対する認識だけが、これまでと一致しなかった。

ロータスはしばらくの間、装置の前に立ったまま動かない。処理は完了しており、次の工程へ移行するべき状況でありながらも思考はその場に留まり続ける。正しいはずのものの中に、ただ一つだけ受け入れられない要素が存在している。

蓄積され続けた『何か』は、ロータス自身の思考や思想にまで影響を及ぼしていた。

◇　◇　◇

最終感情処理場における業務はこれまで同様に継続されていた。搬入される対象、処理工程、出力される結果、そのすべてが既定の範囲内で安定していた。装置の挙動に異常はなく、数値も正常値を維持している。職員同士のやり取りも必要最小限に留まり、施設全体としての機能は何一つ損なわれていない。

表面的には、何も変わっていなかったが、ロータスの内心はすでに変化していた。

それはある一点を境に発生したものではなく、これまでの積み重ねの中で徐々に形を持ち、気づいた時にはすでに前提として成立していた。処理場で感じた微細な違和感、事故によって流入した感情の残滓、そして少女との反復的な接触。それらが個別の現象としてではなく、一つの連続した

流れとして結びついた結果、ロータスの思考体系の中に、これまで存在しなかった基準が生まれている。

それは明文化されていない。数値化もされていない。

それでも、確かに機能していた。

その日、処理を終えたロータスは、通常であれば次の工程へと移行するはずの動線を、わずかに外れる。逸脱と呼ぶにはあまりにも小さな差異であり、監視システムに検知されるほどのものではない。だが、その動きはこれまでの行動パターンには存在しない選択だった。

施設内の通路はどこへ向かっても同じような景観が続いている。特定のパターンで統一された壁面、一定の間隔で配置された照明、無駄のない構造。それらは空間の識別を困難にする一方で、機能としては極めて合理的だった。

その中を進みながら、ロータスは自分の行動を客観的に把握している。

現在位置、移動経路、到達点。それらはすべて明確に認識されている。向かっている先が、少女の隔離区画であることも含めて。

理由は整理しないまま、行動だけが先行している。

区画の前に到達し、ロータスは一瞬だけ足を止める。ガラスの向こう側には、いつもと変わらない白い空間が広がっており、その中央に少女が座っている。その姿はこれまでと同様であり、外見的な変化は見られない。

しかし、その光景に対する認識は、以前とは異なっていた。

少女はすぐにロータスの存在に気づき、顔を上げる。視線が交差し、そのまま立ち上がってこちらへと歩み寄る。その動作には迷いがなく、距離を測るための間も存在しない。

「あ、来てくれた。　今日は早いね」

その言葉は特別な意味を持たないはずでありながら、単なる事実の確認として処理するには、わずかに余剰が含まれているように感じられた。

「今日はどうするの？　お話？　それとも、前の続き？」

提示された選択肢は曖昧であり、優先順位も明確ではない。教育という観点から見れば、後者が適切である可能性が高い。しかし、その判断は即座には下されなかった。

ロータスは少女を見つめる。

白い瞳は相変わらず何も示していない。それでも、その中に自分の姿が映っているという事実だけが、明確に認識される。

これまでであれば、その光景に対して特別な評価を下すことはなかった。

だが、今は違う。

思考の中にある基準が、すでに変化している。

この少女は、処理対象ではない。

その認識は、論理的な検証を経て導き出されたものではなかった。

既存のシステムと照合すれば矛盾が生じることも理解している。それでも、その結論は修正されない。

少女はガラスに手を当てたまま、すぐには離れなかった。いつもであれば短く言葉を交わしたあ

と、すぐに興味を別の対象へと移していたはずだが、その日はわずかに動きが遅れる。

「ねぇ、ロータス」

呼び止める声は、これまでと同じ調子でありながら、ほんのわずかにだけ慎重さを含んでいた。

「ここってさ、みんな……いなくなるんだよね」

その言葉は確認でありながら、すでに理解しかけている前提を含んでいる。

ロータスは応答しない。

「でもさ」

少女は続ける。

「ロータスは、いなくならないよね」

それは問いではなかった。

期待でも、確認でもない。ただ、そうであってほしいという前提が、そのまま言葉になっている。

ロータスはその言葉を受け取り、わずかに視線を落とす。即座に否定することはできたが、その選択は行われない。

「……来ます」

返された言葉は短いが、それはこれまでのどの応答よりも明確な意味を持っていた。

少女はその言葉を聞き、小さく息をつく。

「そっか」

それだけを言って、少女はガラスに手を当てる。

その仕草を見ながら、ロータスは自分の内側で成立している事実を改めて確認する。

これは、修正されるべき誤差ではない。

排除すべき異常でもない。

これは、選択である。

与えられた選択肢の中から選んだものではなく、そもそも選択肢の外側に存在していたものを、

自分の基準として採用した結果。

ロータスはそのまま視線を外さず、少女を見続ける。

白い瞳の奥に、何かがあるわけではない。

それでも、その存在は確かにそこにある。

その事実だけで、十分だった。

◇　◇　◇

施設の構造は変わらない。白で統一された通路、均等に配置された照明、不要な要素を排除した

設計は、空間としての個性を極限まで削ぎ落とし、そこにいる者の認識すら均質化することを目的としている。その中を歩く限り、方向や距離の感覚は次第に曖昧になり、どこに向かっているのかという意識さえも希薄になっていく。

だが、ロータスの足取りは迷わなかった。経路は正確に把握されており、分岐点ごとの選択も誤差なく処理されている。目的地は明確であり、その到達に必要な動作はすべて最適化されているはずだった。

それにもかかわらず、その移動にはこれまでと異なる性質が含まれていた。

処理場へ向かう動線の途中で、ロータスは足を止める。

そこは、通常であれば通過するだけの区画だった。搬入前の個体が一時的に収容されるエリアであり、感情の抽出を待つ段階の人間が、静かに配置されている。外見上は健康を保っているように見えるが、その多くはすでに納情の準備段階に入っており、個体としての価値は消費される前提で扱われている。

ガラス越しに、その様子が見える。

一人の男性が、椅子に座っている。視線は定まらず、何かを見ているわけでもなく、ただ前方を向いている。その瞳はすでに色を失いかけており、彩度は著しく低下している。その状態が何を意味するのか、ロータスは理解している。

納情の前段階であり、感情の安定化の最中。そして、その先は処理が待っている。

それは例外なく適用される工程であり、ここにいる個体もまた、その流れの中にある。

ロータスはしばらくの間、その光景を見ている。分析するためでも、確認するためでもなく。ただ、そこに存在している状態を、そのまま認識している。

男性の手が、わずかに動く。何かを掴もうとするような動きだったが、その対象は存在せず、す

ぐに力を失って元の位置へと戻る。その一連の動作には意図が見られず、意味として成立していない。

それは、機能の低下だった。

思考の連続性が断たれ、意思が維持できなくなっている状態。納情によって感情が削ぎ落とされることで、個体としての活動性が失われていく過程。

それは、この施設において繰り返し観測されてきた結果であり、特別なものではない。

ロータスはその事実を、何度も確認してきた。

そして、そのすべてを問題として扱うことはなかった。

だが。

その光景に、別の像が重なる。

ガラス越しにこちらを見つめる少女の姿。

白い瞳。変化しない色。まだ何も失っていない状態。その二つの像は、本来であれば連続している。

ここにいる個体と、あの少女は、同じ工程の中に存在している。時間の差があるだけで、辿る過程は一致している。

その認識を、ロータスは否定しない。

否定する理由は存在しない。なぜならそれは事実であり、これまでのすべてと矛盾しない。

しかし、その事実をそのまま受け入れようとした瞬間、思考がそこで止まる。受け入れるという処理が、完了しない。

その状態を、ロータスは明確に認識する。

処理できない情報ではない。理解できないわけでもない。それでも、結論だけが成立しない。

なぜか。

問いは浮かぶが、それに対する答えは外部から与えられるものではない。

ロータスは視線をわずかに落とし、再び男性の様子を見る。

色を失いかけた瞳。意味を持たない動作。維持できなくなった意思。それらはすべて、処理の結果として正しく導かれた状態だった。

そして、それと同じ状態が、あの少女にも適用される。

その未来を、具体的な像として思考の中に再現する。

白い瞳が、さらに何も映さなくなる。言葉が減り、動きが鈍り、やがて何も発しなくなる。その過程を、途中で止めることはできない。止める理由も、存在しない。

――そのはずだった。

その像を最後まで維持することができない。そこから先を、思考が進めない。

ロータスはゆっくりと視線を上げる。

そのとき、初めて理解する。

これは新しく選んだものではない、すでに選ばれていたものだ。

少女と向き合った最初の瞬間、あの白い瞳を見たとき。言葉を交わし、その反応を受け取ったとき。

そのすべての段階で、すでに基準は変わっていた。

ただ、それを自覚していなかっただけだ。

ロータスはその場を離れ、再び通路を歩き始める。

進む方向は変わらない。

足取りも変わらない。

だが、その行動を支えている前提は、すでに以前のものとは一致していなかった。

処理場へ向かう理由も。

少女の元へ向かう理由も。

すべてが、同じ基準の上で繋がっている。

それは合理ではない。

効率でもない。

それでも、明確に存在している。

ロータスはその事実を否定せず、修正もしない。

ただ、そのまま受け入れる。

それが、自分の中で成立しているものだからだ。

その瞬間。

WEEDOという枠組みの中で形成されていた『正しさ』は、静かにその優先順位を失っていた。

◇　◇　◇

決定はすでにロータスの中で完了していたが、それを外部に表す形は、可能な限り歪められていた。

施設内の状態はこれまでと変わらず、処理ラインは安定し、監視システムも正常に稼働している。だが、その均質な流れの中にはわずかな遅延と再配分が生じており、それが各区画の連携に微細な隙を生んでいた。その差異は数値としては誤差の範囲に収まり、通常であれば無視されるものだったが、意図的に選択された場合に限り、行動の自由度として機能する。

ロータスはその余白を利用する。

処理業務を終えたあと、これまでと同じ動線を辿り、少女の隔離区画へと向かう。歩行速度は一定であり、視線の動きにも変化はない。外部から観測すれば、それは日常の反復として処理される動作だった。

ガラス越しに見える白い空間、その中央にいる少女もまた、これまでと同じ位置にいる。視線が合うと同時に、少女は立ち上がり、いつものようにこちらへと近づいてくる。

「来てくれた」

その言葉には、これまでと同じ調子が保たれている。

「今日はなにするの？」

問いも変わらない。

ロータスはその前で足を止め、ガラス越しに少女を見つめる。その距離はこれまでと同一であり、物理的な隔たりも変化していない。それでも、その意味だけがわずかに変質していることを、内部ではすでに認識していた。

「……今日は、少し違う話をします」

その前置きは曖昧であり、具体的な内容を示さない。

少女は軽く首を傾げるが、そのままガラスに手を当てたまま待つ。

「ここでの時間は、いずれ終わります」

それは事実の説明としても成立する言葉だった。

この施設において、個体が同じ状態を維持し続けることは前提とされていない。変化し、処理され、次の段階へと移行する。それは全員に適用される流れであり、特別な意味を持たない。

「……うん？」

少女は完全には理解していないまま、短く応じる。

「その前に、確認しておくべきことがあります」

言葉は続くが、その内容は依然として具体性を持たない。

「もし、ここにいない状態になった場合でも」

そこまで言って、わずかに間が置かれる。

「変化は、継続します」

それは説明としては不十分でありながら、ロータスの中では明確な意味を持っていた。

少女はその言葉を受け取り、少しだけ考えるような仕草を見せる。

「えっと……どういうこと？」

問い返しは自然だったが、そのまま解釈に至る様子はない。ロータスはその反応を確認するが、追加の説明を行わない。

そもそも理解されることを前提としていないため、その必要がない。

「……次に会うとき、環境が変わっている可能性があります」

それは未来に関する仮定の形を取っているが、実際には一方向の決定だった。

「そっか」

少女は軽く頷く。その中に含まれている意味は浅く、深い理解には至っていない。

「でも、また来るんでしょ？」

ロータスはその言葉を受け取り、わずかに視線を落とす。

「……はい」

短い肯定。それは事実の保証ではなく、成立させるための前提だった。

少女はその返答に満足したように、小さく笑う。

「じゃあ、いいや」

その言葉には迷いがなく、条件も伴わない。

「待ってるね」

その一言で、会話は完結する。

ロータスはそれ以上言葉を重ねない。必要がないからではなく、それ以上の説明が意味を持たないからだ。

「……では、また」

最後にそれだけを告げる。

それは別れの言葉としては成立していないが、行動としては十分だった。

ロータスは振り返ることなくその場を離れる。

背後には変わらない白い空間があり、その中に少女が残されている。

その光景は、明確な像として思考の中に保持される。

それを引き戻すための行動は、選択されない。

そのまま動線を切り替え、施設外縁部へと向かう。

補助通路に入り、監視の薄い経路を選択しながら移動する。巡回ドローンの動きを読み、認証の必要な扉を通過し、最短距離で外部隔壁へと到達する。

だが、その時点で状況は変化していた。

警告灯が点灯している。

完全な警報ではないが、内部で発生した不整合が検知され、セキュリティが段階的に引き上げられている。

想定よりも早い。

ロータスは即座に判断を切り替え、端末へとアクセスする。開放処理を強行し、認証を通過するが、ログの補正が追いつかない。そのため、この操作は記録として残る。

それでも、実行は中断されない。

隔壁が開く。

同時に、遠くで警報が鳴り始め、ロータスはそのまま外へと踏み出す。

背後で隔壁が閉じる音が響く。

その音は小さく、しかし明確に区切りとして機能していた。

次の瞬間、走る。

均質ではない地面、制御されていない空気の青空の下を、建造物を。背後から追跡の気配が発生

し、ドローンの駆動音とスキャンの波が迫る。回避しながら進むが、負荷は蓄積していく。

背後から気配が消えてもなお、ロータスは走り続けた。

やがて、足が止まる。

呼吸が乱れ、視界が傾く。それでも前へ進もうとするが、その動作は途中で崩れる。

地面に倒れ込む。視界が白に染まっていき、倒れた鈍い音だけが頭の中で反響する。

複数の足音が聞こえる。

「……いた、こっち！」

知らない声。

「WEEDOの……？　いや、違うなこれ」

影が視界に入る。

「生きてるみたい。　回収するね」

その言葉を最後に、意識が途切れる。

白で統一された世界は、そこで一度、完全に断ち切られた。

◇　◇　◇

意識が戻ったとき、最初に知覚したのは統一されていない音の重なりだった。

一定間隔で鳴る機械音ではなく、誰かの足音や金属の擦れる音、遠くで交わされる会話が断続的に混ざり合い、空間の中で散らばっている。そのすべてが整理されずに存在しているにもかかわらず、不思議と機能として成立していることが、この場所の在り方を端的に示していた。

視界を開くと、露出した構造材と、継ぎ足された痕跡の残る天井が見える。白で統一された環境とは異なり、そこには経過と用途がそのまま積み重なっていた。

「ん、起きた？」

軽い声が落ちる。

視線を向けると、一人の人物が壁にもたれるように立っている。力の抜けた姿勢でありながら、周囲への意識は途切れていない。その在り方は、これまで接してきた職員とは明確に異なっていた。

「どー？　動けそう？」

「問題ありません」

ロータスは短く答え、身体の状態を確認する。わずかな遅延はあるが、行動に支障はない。

「うんうん、よかった～。　死なれたら困っちゃうしね」

軽く言いながら、その人物は一歩近づく。

「あなた、名前は？」

唐突でありながら、自然な問いだった。

ロータスは一瞬だけ間を置く。出生時の識別番号ではなく、個体としての呼称を求められている。

「ロータスです」

そう答えると、その人物は少しだけ考えるように視線を上げる。

「ロータスかぁ……ん～～じゃ、ローちゃんとか？」

ロータスはその呼称を内部で処理する。短縮された名称、意味の付加、距離の変化。それらを一度評価し、問題がないことを確認する。

「……ご自由に呼んでいただいて構いません」

その返答を聞いて、相手は軽く笑う。

「お堅いねぇ。　よし、じゃあ今日からローちゃんね」

それで確定する。

「うちはデュランタだよ。　デューちゃんでもランちゃんでも好きに呼んでね」

名乗りもまた、軽い。

だが、その言葉の中に含まれる距離感は、これまでの環境には存在しなかったものだった。

それからの時間、ロータスはこの場所での在り方を学習していく。

WEEDO対抗勢力、『葬儀屋』。ここではすべてが固定されていない。役割は状況によって変わ

り、判断は個々に委ねられる。そのため、行動の基準は外部から与えられるものではなく、自身の中で構築する必要があった。

観察し、適応し、そして徐々に介入する。

その過程の中で、ロータスは自然とこの集団の中に組み込まれていく。

「ローちゃん、ちょーっとこっち来て」

ある日、デュランタに呼ばれる。

案内された先には、複数の武器が無造作に並べられていた。統一された規格はなく、それぞれが異なる用途と設計を持っている。

「もしここにずっといるならさ、戦えないと普通に詰むから」

軽い口調で言いながら、腕を組む。

「どれ使う？適当に触っていいよ」

ロータスは並べられた武器を順に確認していく。銃器は射程と安定性に優れるが、取り回しに制約がある。近接武器は反応速度に依存するが、制御の自由度が高い。

その中で、一つの武器に視線が止まる。

鎌。

長い柄と、大きく湾曲した刃。斬撃だけでなく、引き寄せや制御にも応用できる構造を持っている。

「おー、それ選ぶんだ」

デュランタは少しだけ意外そうにしながらも、すぐに笑う。

「もうちょっと無難なの行くのかと思ってた。　でもいーじゃん、なんかローちゃんっぽい気がするし」

その評価は感覚的なものだが、否定する要素はない。

「んじゃ、試し斬りにでもいこっか」

その言葉の直後、外部から警告音が入る。

「うわ、タイミングすっごー」

デュランタが軽く笑う。

「WEEDOのドローン来てるみたい。　他のメンバーも一応近くにつけておくし、そのまま試しに行く？」

問いかけという形を取りながら、デュランタはすでに周囲のメンバーに呼びかけ動き出している。ロータスもそれに続く。

外に出ると、空中に複数の機影が確認できる。均一な構造、正確な軌道、無駄のない索敵。それは見慣れた挙動だった。

「……全部で八機かー。　ウチは戦闘はあんまりだからサポートしかできないけど……任せてへーき？」

「やってみます」

短い返答をし、ロータスは即座に動く。

ドローンがこちらを捕捉し攻撃態勢に入る。

射線を外しながら前進し、鎌を構える。弾道を予測し、最短距離で間合いに入る。

一機目。

刃を振り抜くのではなく、引き寄せる。ドローンの機体に刃を引っ掛け、そのまま軌道をずらす。

姿勢が崩れた瞬間、回転を加えて叩き落とす。

二機目。

横から接近し、刃の内側で制御しながら機体を拘束する。そのまま地面へと叩きつけ、破壊する。

動きは滑らかで無駄がなく、鎌の特性をそのまま拡張したような戦闘だった。

やがて数分後、空域は静かになる。

残骸が落ちる音だけが遅れて響く。

「……え～、なにそれ」

デュランタの声が後ろからする。

「鎌で機体落とす人、初めて見たんだけど」

半分呆れたように笑う。

「ローちゃん、センスありすぎでしょ」

その評価は軽いが、否定ではない。

ロータスは武器を下ろし、遠くを見る。

WEEDO施設の方向だ。

白い空間と、そこに残された少女。

その像は、ここに来ても変わらない。

残骸が落ちる音が収まったあとも、空気にはわずかな緊張が残っていた。撃墜されたドローンの一部からはまだ微弱な電流音が漏れており、それがこの戦闘が偶発的なものではなく、継続して発生する衝突の一部であることを示している。

「ま、こんな感じでさ」

デュランタが軽く肩をすくめながら言う。

「ウチら、ああいうの相手にしてんの。　WEEDOの回収とか妨害とか、あと……まぁ、奪還？」

最後の言葉だけ、わずかに曖昧に濁される。

「奪還、ですか」

「そそ。　あそこってさ、人の感情ぜーんぶエネルギーに変えちゃうじゃん」

軽い口調のまま、だが内容だけがはっきりと重くなる。

「いらないって切り捨てて、均して、使いやすくしてさ。　で、残った人間はほぼ空っぽ」

その説明は、ロータスにとって既知の事実だった。

「でもウチらはさ、それ『もったいない』と思ってんの」

デュランタはそう言って、落ちたドローンの残骸を軽く蹴る。

「感情って、ただの燃料じゃなくない？って話。　無駄とかノイズとかじゃなくて、その人そのものっていうか」

言葉は抽象的で、定義としては曖昧だった。

だが、その曖昧さ自体が、これまでのシステムには存在しなかった性質でもある。

「だから取り戻すの。　奪われた分も、これから奪われる分も」

その言葉には、理論ではなく意思があった。

ロータスはそれを聞きながら、内部で照合を行う。

WEEDOの構造、目的、合理性。

そして、目の前の組織の行動原理。

どちらも成立しているが、決定的に異なる点が一つある。

対象の扱い。

資源として扱うか、個として扱うか。その差異が、すべての分岐点になっている。

「……まあ難しいことはいいけどさ」

デュランタは空気を軽く戻すように手を振る。

「ウチらはそういうことしてる集まり。　で、ローちゃんはどうする？って話」

デュランタが続ける。

「正式に入る？　それともまだ様子見？」

選択が提示され、ロータスは視線を戻す。

「加入します」

迷いはない。

「おっけー、決まりね」

軽く頷く。

「じゃあ今日から正式に葬儀屋の仲間入りってことで。　よろしくね、ローちゃん」

その言葉で、すべてが確定する。

所属が変わり、環境が変わる。

だが、目的は変わらない。

ロータスは鎌を握り直す。

この武器は、そのための手段の一つに過ぎない。

時間が必要だった。

準備が必要だった。

そして数年後、そのすべては一つの行動へと収束する。

あの場所へ、再び踏み込むために。

それからの数年間で、ロータスは幾度も前線に出た。

そのすべてにおいて、デュランタの声は常に背後にあった。

「ローちゃん、そのまま突っ込むと挟まれるよ。　右、ちょい遅らせて」

最初は指示に従うだけだったが、その精度は次第に理解へと変わっていく。

「……今なら行けるよ、ローちゃん」

その一言で動く。根拠は示されない。

だが、その判断は外れない。

別の任務では、逆のこともあった。

「ローちゃん、それはダメ。　すぐ引いて」

視界の中では最適に見える選択を、否定される。

一瞬の遅れ。

その直後、想定していなかった別ルートからの攻撃が通過する。

もしそのまま進んでいれば、回避は不可能だった。

「……ね？　ウチの言うことあってたっしょ？」

通信越しに、軽く笑う声。

そのやり取りは一度ではなく、繰り返されるたびに判断は蓄積される。

やがてロータスは、自身の判断の一部を、デュランタに委ねるようになる。

依存ではなく、役割分担として最も合理的な形だった。

前線と後方。

視界と俯瞰。

その二つが合わさることで、初めて成立する動きがある。

そしてその前提は、疑われることがなくなっていた。

◇　◇　◇

WEEDOに突入する日付は、すでに変更不可能なものとして確定していた。少女の納情が実行される日であり、それは施設の管理システムの中で例外なく処理される工程として登録されているため、個別の事情や外部からの干渉によって覆ることは想定されていない。

だからこそ、その流れに割り込むために必要だったのは偶然ではなく、長い時間をかけて積み上げられた準備と、わずかな隙を正確に捉える判断だった。

「ローちゃん、聞こえてる？」

通信越しに届くデュランタの声は、これまでと変わらない軽さを保っていながらも、その裏にある緊張を隠しきれてはいない。

「はい」

ロータスは短く応答しながら、視線を前方に固定する。目の前にあるのは、かつて自分が日常としていた施設の外壁であり、白で統一された無機質な構造は、外から見てもその均質さを崩していない。

「外周ラインは予定通り崩れてるから、そのまま侵入ルート進んでいいよ。時間ギリだから、寄り道はナシで」

指示は簡潔であり、無駄がない。その言葉を受け取りながら、ロータスは外壁を越え、内部へと足を踏み入れる。

空気が変わる。外の不均一な環境から、再び管理された空間へと戻ることで、温度や湿度の差異が一瞬で均され、音の反響も一定の規則性を取り戻す。その変化は感覚として明確に認識されるが、それに対する違和感はすでに発生しない。

数年前まではここが基準だったが、今はそうではない。

「右、巡回来るよ。三、二、一――今」

デュランタのカウントに合わせて身体を動かし、視界に入る前のドローンへと攻撃を通す。機体は反応する間もなく制御を失い、壁面へと叩きつけられて沈黙するが、その動作に意識を割くことなく、ロータスは次の区画へと進む。

通路の構造、扉の配置、認証の位置、そのすべては記憶と一致している。だが、それをなぞる行

動の意味だけが、かつてとは完全に変わっていた。

「内部警戒、上がり始めてるね……別ルート回す？」

「このまま進みます」

「りょーかい。　じゃあサポート厚めにするわ」

短い応酬のあと、ロータスは速度を落とさず進み続ける。鎌を振るう動作もまた無駄がなく、接近してくるドローンを引き寄せて軌道を崩し、そのまま床へと叩き落とす動きは、すでに身体の一部として定着していた。

戦闘は目的ではない。ただの通過点であり、排除すべき障害として処理される。

やがて、目的の区画へと到達する。

納情区画。白で統一された室内は以前と変わらず、外部からの影響を完全に遮断する構造を維持している。その中央に、少女は座っていた。

時間は確実に経過しているはずだが、その姿は記憶の中の像とほとんど差がない。ただ、瞳の奥にあったはずの微細な揺らぎが薄れ、静かに均されつつあることだけが、確実に進行している変化として認識される。

ロータスは足を止めることなく制御端末へと手を伸ばし、必要な操作を実行する。数値が変化し、ロックが解除され、わずかな駆動音とともに隔壁が開き始める。

「あと三十秒。　別部隊来る、急いで」

デュランタの声が重なる。

隔壁が完全に開き、境界が消える。ロータスはそのまま内部へと踏み込む。

少女が顔を上げる。

一瞬の沈黙のあと、その視線がこちらを捉える。

「……ロータス」

その言葉は、あの日と同じ調子で発せられる。時間が経過しても変わらなかったものが、そこに確かに存在していた。

ロータスは歩み寄りながら、手を伸ばす。

「行きます」

それだけをデュランタに告げる。

「LI-6891さん。　助けに来ました。　行きましょう。」

少女もまた、わずかに手を伸ばす。

距離が縮まる。

あと少しで触れられる。

その一瞬、時間がわずかに引き延ばされる。

少女の瞳が、初めて揺れる。

白の中に、ほんのわずかな変化が生じる。

それは色ではない。しかし、確かに『何か』がそこにはあった。

――その瞬間。

衝撃が走る。

音は遅れて認識され、脳を貫く違和感が遅延して知覚される。背後からの射撃であることを理解したときには、すでに姿勢は維持できず、足元の感覚が失われている。

視界が傾き、床が近づく。

立っている姿勢を維持できず、そのまま崩れるように倒れ込む。

「ローちゃん！？　ローちゃん！」

通信の向こうで、デュランタの声が歪むが、その音もすぐに遠ざかっていく。

視界の中には、少女の姿だけが残る。

伸ばされた手が、届かない位置で止まっている。

その距離は、もう埋まらない。

意識が薄れていく中で、断片が浮かび上がる。

ガラス越しに見ていた視線、繰り返された会話、白い空間の中で積み重なった時間、外へ出たときに感じた空気の差異、デュランタの軽い声、与えられた呼び名、戦闘の中で積み上げた動作、そのすべてが個別の記憶としてではなく、一つの連続した流れとして繋がっていく。

それらはこれまで分類されず、定義されることもなかったが、今この瞬間に限っては、明確な形を持って認識される。

合理でもなく、効率でもなく、それでも行動の基準として機能していたもの。

理解する。

積み上げられた『何か』が何であるかを。

これが、きっと『感情』であり『愛』だったんだろう。

その認識は遅く、しかし曖昧さを一切含まない完全な形で成立する。

少女の姿が、最後に視界に残る。

白い瞳。

その中に映る自分の像。

そこで、すべてが途切れた。

色葬

後編

白は、当たり前の色だった。

壁も、床も、天井も、すべてが同じ白で塗り潰されていて、影は薄く、奥行きは曖昧で、どこまでが空間なのかも分かりづらい。

それでも違和感はなかった。ここが世界のすべてであり、それ以外を知らないからだ。ガラスの向こう側も同じように白い。ただ一つ違うのは、そこに人がいるかどうかだけだった。

「ねぇ、あなた」

両手をガラスに押し当てて、少女は外側を覗き込む。冷たい感触が掌に伝わるが、それを不快だとは思わない。ただ、触れているという事実だけがそこにある。向こう側に立っている人物は、一瞬だけ視線を上げた。黒い髪。白ではない色。それだけで、少女にとっては十分に特別だった。

「新しい人？」

問いかける声にためらいはない。初対面という概念も、距離を測るという行為も、この少女の中には存在しない。ただ、そこにいるから話しかける。それだけだった。

「はい。　本日よりLI-6891さんの教育担当として配属されました、ロータスです」

落ち着いた声だった。抑揚は少ないが、それでも他の人間とはどこか違う。言葉の端に、わずかな『温度』のようなものが混じっている。その違いを理解できないまま、少女はそれを面白いと感じていた。

「きょういく……？」

「あなたがここで過ごすために必要なことを、教える役割です」

「ふーん……」

意味は理解できなかったが、不都合はなかった。分からないものはそのままにしておけばいい。

いずれ分かるかもしれないし、分からなくても困らない。それよりも、目の前の存在の方がずっと気になった。

「じゃあさ、いっぱいお話ししてくれる？」

ガラス越しに顔を近づける。距離の感覚が曖昧なまま、ただ相手を覗き込む。

「……必要に応じて」

少しだけ間があって、そう返された。

「ほんと？　やった」

自然と、口元が緩んだ。それがどういう状態なのかは分からない。ただ、内側が少し軽くなるような感覚があって、それをそのまま外に出しただけだった。

「じゃあロータス、ねぇ、あと少しだけ」

「何でしょうか」

「お話し、聞かせて？」

ガラス越しに向けた言葉に、ロータスはほんのわずかに視線を逸らした。その一瞬の揺らぎが妙に印象に残る。理由は分からないが、なぜか目が離せなかった。

「……少しだけ、ですよ」

「うん」

それで十分だった。

白しかなかった世界に、黒という色が増えた。それだけで、この空間は少しだけ違って見えた。

理由は分からないが、その違いを少女は好ましく思っていた。

時間の感覚は曖昧だった。ここでは一日がどれくらいの長さなのかも、どれだけの時間が過ぎたのかも分からない。ただ、ロータスが来て、話をして、帰る。それが繰り返される。それだけで、世界は十分だった。

「外ってさ、どうなってるの？」

ある日、少女はそう尋ねた。ロータスは少しだけ考える素振りを見せてから口を開く。

「ここよりも、ずっと広いです。空があって、建物があって、人がたくさんいます」

「広い？」

想像しようとするが、うまく形にならない。白い空間しか知らない少女にとって、広いという概念はぼんやりとしていた。

「楽しい？」

その問いに、ロータスは一瞬だけ言葉を止める。

「……人によります」

「じゃあロータスは？」

「私は……そうですね。嫌いではありません」

その答えが、なぜか少しだけ引っかかった。けれど理由は分からない。

「そっか。じゃあさ、いつか一緒に行こうよ」

何気なく口にした言葉だった。特別な意味はない。ただ思いついたから言っただけ。ロータスはすぐには答えなかった。ガラス越しにこちらを見つめたまま、ほんのわずかに視線を揺らす。

「……そうですね。その時が来たら、考えましょう」

「ほんと？」

「はい」

その返答だけで十分だった。その約束がどれほど曖昧で、どれほど遠いものなのかも考えなかった。ただ、言葉が返ってきたことが嬉しかった。その感覚の名前は、まだ知らない。

ある日を境に、ロータスは来なくなった。

最初は少し遅れているだけだと思った。次は忙しいのかもしれないと考えた。その次は、また来るだろうと疑わなかった。

時間の感覚が曖昧なまま、待ち続ける。ガラスの前に立ち、何もない向こう側を見つめる。

「ロータス？」

呼んでも、返事はない。

それでも問題はなかった。来ないだけで、いなくなったわけではない。いずれ来る。そういうものだと思っていた。だから待ち続けた。疑問は生まれない。不安も生まれない。ただ、『まだ来ていない』という認識だけが静かに積み重なっていく。

「LI-6891。　準備を」

初めて聞く声だった。複数の人間が部屋に入り、少女を別の部屋に連れていく。いつもと違う動

き、いつもと違う空気。少女はいつもと違う景色を眺めながら歩いていく。

「どこいくの？」

「納情の儀式を行います。あなたの感情を抽出し、エネルギーとして利用する工程です」

よく分からなかったが、特に問題はなさそうだった。ここで行われることはすべて正しいことだと教えられている。だからそれに従う。それだけだった。

部屋に通され、配線らしきものが無数に伸びている椅子に座らされ、身体に端子が取り付けられていく。冷たい感触と規則的な音が、白い空間の中に均一に広がっていく。

「開始します」

機械が動き出す。

少女は、これがどのような行為であるかも何も理解していないまま、ただ受け入れた。

椅子が駆動音を鳴らし始めたとき、扉が破壊された。

激しい音とともに、白い空間が揺れる。

見たことのない光景だった。複数の影が流れ込み、何かが壊されていく。

叫び声のようなものが聞こえたが、それが何かは分からない。ただ一つ、その中に見覚えのある色があった。

黒。

「……ロータス？」

その名を口にした瞬間、胸の奥で何かが強く揺れる。理由は分からない。ただ、その存在がここにいるという事実だけで、内側が大きく動いた。

黒く長い柄で、先端には湾曲した刃がつく武器。ロータスは、その大きな武器を片手に携え少女に近づいてくる。

「LI-6891さん。　助けに来ました。　行きましょう。」

ガラス越しではない、すぐ目の前に差し出された手。それを取るべきかどうか考える。

正しいのはどちらか。ここにいることか、あちらに行くことか。

分からない。

分からないまま、手を伸ばす。

触れる寸前、乾いた音が響いた。

ロータスの身体が、わずかに揺れる。赤い色が白い空間に広がる。それは今まで見たことのない色だった。強くて、濃くて、目を離せない。

「……え？」

何が起きたのか理解できない。ロータスの手はもうこちらに伸びていない。代わりに、床へと崩れ落ちていく。

ロータスの手から離れた武器が、冷たい金属音を響かせる。

「……ロータス？」

呼びかける。

返事はなく、動く気配はない。

「……なんで？」

その言葉と同時に、何かが内側から溢れ出した。

熱い。重い。痛い。

それが何なのか分からないまま、ただ膨れ上がる。理解しようとした瞬間、それは壊れた。音もなく、形もなく、ただ一気に崩れ落ちる。

代わりに残ったのは、空白だった。

何も感じない。何も分からない。ただ、目の前の光景だけが残る。赤い色。動かない身体。差し出されなかった手。

リリウムはその場に立ち尽くしたまま、何も言わなかった。何も考えなかった。何も感じなかった。

その瞬間から、少女の中の『色』は、確かに壊れていた。

◇　◇　◇

警報が鳴っていた。

耳をつんざくような音が、白い空間の中で反響し続けている。先ほどまで断片的に聞こえていた破壊音や叫び声とは違い、明確に異常を知らせる音だった。それでも、少女はその意味を理解していない。ただ、空間の状態が変化しているという事実だけを受け取っている。

視界の先では、警備ドローンがこちらに向かってきていた。動きは速く、迷いがない。明確に、

少女を目標としている。

何よりも先に身体が動いた。

足が引かれる、距離を取る。そのまま視線が横に流れ、床に落ちているものを捉える。

黒く、大きい鎌。さっきまで、あの人が持っていたもの。

少女の動きが、一瞬だけ止まる。身を屈め、鎌を掴む。柄を握った瞬間、金属の冷たさが掌に伝わる。重さが腕に乗る。扱い方は教わっていないはずなのに、その重さは不思議と馴染んだ。

「確保対象、視認。　拘束します」

背後から機械的な声が聞こえる。その言葉の意味は完全には理解できないが、直後に発砲音が響いたことで、それが危険であることだけは分かった。

床に衝撃が走る。

少女は反射的に走り出していた。

白い通路を抜け、開かれた扉の先へと飛び込む。背後では複数の機械音が追ってくる。規則的で、揃っていて、逃げ切れる距離ではないことは直感的に理解できたが、それでも、止まるという選択は存在しなかった。

なぜ逃げているのかは分からない。なぜ追われているのかも分からない。それでも、あの場に留まることだけは、なぜか許容できなかった。

通路の角を曲がる。視界に新たな影が入る。正面から来る別の部隊。少女の動きが一瞬だけ止まる。

挟まれた。

次の瞬間、身体が前に動いていた。

持っていた使い方も分からない鎌を振り上げる。

刃が空気を裂き、そのまま対象に触れる。金属を断つ感触とともに、色が飛び散る。

その瞬間、内側がわずかに動いた。

「……あ」

何かが軽くなるような感覚。理解はできないが、確かに変化があった。

もう一度振る。

同じように、『色』が広がる。

「……アハ」

声が漏れる。自分のものかどうかも分からない。ただ、その行為を繰り返すほどに、内側の何かが微かに反応する。

それが何なのかは、分からない。

気づけば、周囲にいたドローンや警備は地面に転がり、複数の色が絵具をかき混ぜたかのように広がっている。

「ん～、反応的に多分この辺かな……あ、いたいた！　キミ、大丈夫？」

明るい声が割り込んできた。

少女の動きが止まる。視線を向けると、少女よりも少し小さい人影が見えた。白い髪に緑の瞳。WEEDOの職員ではないことは明確だ。

周囲の状況とは不釣り合いなほど明るい雰囲気で、戦場の中にいるとは思えない存在だった。

「いやー、派手にやってたねぇ。　あれ一人でやったの？」

問いかけの意味はよく分からない。ただ、敵意がないことだけは分かる。

少女は鎌を下ろす。

「……誰」

「ウチ？　ウチはデュランタ。　キミは？」

「……」

言葉が止まる。

自分の名前。それが、すぐには出てこない。

識別番号はある。呼ばれていた記号もある。だが、それを『自分』として扱う感覚がない。

「……ない」

「ない？」

「呼ばれ方はあるけど、それは……違う気がする」

デュランタは一瞬だけ考えるように首を傾げ、それから小さく笑った。その笑みは、何かを隠しているような気もした。

「そっかぁ。　じゃあさ、今つけよっか」

「……今？」

「うん。　どうせ必要になるしさ」

軽い口調のまま、少しだけ視線を上げる。

「ウチが言い出したことだけど名づけってむっずいなぁ……」

「白くて、なんか綺麗で……でもちょーっと危ない感じで……」

短く考えたあと、ぱっとこちらを見る。

「リリウム、とかどう？」

その音が耳に入る。

「……リリウム」

口の中で繰り返す。識別番号でしか呼ばれたことのない少女にとって、響きが柔らかくスッと受け入れられた。

「はい」

「よし、決まり！　じゃあリーちゃんね」

あっさりと変えられた呼び方に、違和感はなかった。むしろ、先ほどの音よりも距離が近い気がした。

「おっとリーちゃん。　ここにいたらまた捕まっちゃう。　行くなら今だよ」

周囲の状況を見れば、それは明らかだった。まだ追手は来ている。ここに留まれば、いずれ囲まれる。

リリウムは頷く。

「分か……りました」

慣れない敬語で、短く返事をする。

外の空気は、白ではなかった。

空は青く色付き、建物にはわずかではあるが濃淡がある。デュランタに連れられてやってきた建物の中には複数の人間がおり、それぞれ違う色の瞳を持っていた。そのすべてが未知だったが、興味はなかった。ただ、白ではないという事実だけが認識される。

デュランタに手を引かれながら、リリウムは周囲を見渡す。

「ね、リーちゃん。　さっきの見てさ、どう思った？」

「……何のことですか」

「ほら、斬ったとき。　機体から色のついた液体みたいなの出てきたじゃん？」

その問いに、リリウムは少しだけ考える。

「……分かりません。　白ではない、というだけです」

「あれが、エネルギーに変換された感情だよ」

「……感情」

聞いたことはある。だが、それが何を指すのかは分からない。

「ウチらさ、それ使って戦ってんの」

そう言って、デュランタは小さな容器を取り出す。中には淡く揺らめく色が閉じ込められていた。

「WEEDOが抜き取ったやつの残りとか、捨てられたやつとか。まぁ～色々」

「…… エネルギー、ですか」

「まぁね。　でもさ、ウチらも結局これ使ってるから、やってること自体はあいつらとあんま変わんないんだよね」

軽く言いながら、肩をすくめる。

「じゃあなんでやるんですか」

自然と出た問いだった。

デュランタは少しだけ考え、それから笑う。

「さぁね。　ウチはただ、ああいうやり方が気に入らないだけかな」

「気に入らない……」

「効率がいいとか、正しいとか、そういうの全部抜きでさ。　嫌だから壊す。　エゴの押し付けだよ、たぶん」

その言葉は、どこか曖昧で、それでいて妙に強かった。

リリウムは、しばらく何も言わなかった。

その言葉を、分からないままにしておくこともできるはずだった。ここに来る前と同じように、

考えなければいいだけの話だ。

けれど。

「……ここにいると、」

「ん？」

「分からないものが、増えます」

言葉にしながら、リリウム自身も整理できていないことが分かる。それでも、止めなかった。

「でも、それを……そのままにするのは」

わずかに間が空く。

「……嫌です。　分からないまま、終わるのは」

理由ではなく、ただの感覚だった。

デュランタは少しだけ目を細めて、リリウムを見る。

「そっか」

それ以上は何も言わなかった。

「じゃあ、決まりだね。リーちゃんは、ウチら側」

軽く言うその言葉に、リリウムは頷く。

理由は、まだ分からない。それでも、ここに残ることだけは、はっきりと決まっていた。

◇　◇　◇

葬儀屋での生活は単純だと、リリウムは聞かされていた。任務が与えられ、対象を破壊し、その過程で回収された色を使い、再び戦う。その繰り返し。それだけだと説明されていたし、実際にやることも大きくは違わなかった。

ただ、その単純さの中身がどういうものなのかは、この時点ではまだ理解していなかった。

「じゃ、リーちゃん。　今日は初任務ね」

デュランタはいつもと変わらない調子でそう言いながら、端末を軽く放るように渡してくる。受け取った端末には簡易的な施設構造と、いくつかの反応点が表示されていた。崩壊しかけた回収施設、残留エネルギー、未処理領域。並んでいる情報は理解できるが、それが具体的にどのような光景を意味するのかまでは結びつかない。

「WEEDOの納情施設の残骸。　完全には壊れてないから、まだ色が残ってるっぽいんだよね。ま、掃除みたいな感じ？」

軽く言うその言葉に、リリウムは頷く。掃除という言葉の意味は分かるが、それと色がどう結びつくのかは分からない。ただ、やるべきことがあるという点だけは明確だった。

施設内部に足を踏み入れると、空気の質が変わった。崩れた壁の隙間から風が入り込み、わずかに埃を巻き上げている。床や壁には、乾ききっていない色がまだらに残っており、白だったはずの空間に不均一な濃淡を作っていた。その中を進むたびに、足音がわずかに遅れて反響し、空間が奥へと沈んでいくような感覚を生む。

「……奥から、来るよ」

デュランタの声がわずかに低くなる。その直後、通路の奥から機械音が響き、損傷した警備ドローンが複数、こちらに向かって加速してくる。動きは不安定だが、標的認識は正確だった。

リリウムは鎌を構える。思考は挟まらない。ただ距離を測り、振る。

刃が機体を断ち、内部から色が噴き出す。

その瞬間、視界がわずかに歪んだ。

暗い。狭い。押し込められるような圧迫感。

――こわい

意味の分からない感覚が、ほんの一瞬だけ通り抜ける。

すぐに消えるが、消えたはずの余韻だけがわずかに残る。リリウムは動きを止めずにさらに振る。二体、三体と斬り伏せるたびに、同じような何かが混ざる。それは長くは続かず、形も持たな

いまま消えていくが、確実に『自分のものではない何か』だった。

戦闘が終わり、静寂が戻ったあとも、その感覚は完全には消えなかった。

「今の、何ですか」

言葉にしながら、リリウム自身も曖昧だと分かっている。それでも問いは出た。

「んー？　ああ、流れたやつ？」

デュランタは軽く頷く。

「残ってる感情が濃いとさ、ああいうの混ざるんだよね。　今のは多分、恐怖とか」

恐怖という単語は理解できる。だが、その中身は分からない。ただ、さっきの感覚と結びつく何かがあることだけは分かる。

「気にしなくていいよ。　そのうち慣れるとは思うし。　あ、気分悪くなったら言ってよ？」

軽く言われる。その言葉に対して否定する材料もなかったが、納得もしていなかった。

さらに奥へ進むと、施設の中心付近に、人の形をしたものがあった。壁にもたれかかるように座り込み、動かない。呼吸の有無も分からず、ただそこに残っているだけの存在だった。

「それ、抜かれた後のやつ」

デュランタが言う。

「完全に空っぽ。　感情全部持ってかれて、そのまま放置」

リリウムはその存在を見つめる。何も感じないはずだった。ただの対象、ただの結果。そう認識できるはずなのに、視線が外れない。

「……これ」

言葉が自然に出る。

「これは、人ですか」

「人だよ。　だった、って言った方が正しいかもだけど」

その言葉と同時に、頭の奥で何かが引っかかる。白い部屋、ガラス、差し出された手、届かなかった距離。そこまで浮かび上がって、そこで止まる。まるで先に進むことを拒否されるように、思考が遮断される。

「……」

「リーちゃん？」

デュランタが少しだけ顔を覗き込む。

「……何でもないです」

リリウムは視線を逸らす。考えないようにする。考えようとすると、先ほどの混ざる感覚が強くなる気がした。

「……あー、もしかして」

デュランタがふと思い出したように言う。

「ローちゃ……ロータスのこと、引っかかってる？」

その名前が出た瞬間、リリウムの思考が止まる。

ロータス。

聞いたことがある。知っているはずの音。けれど、その先がない。名前だけが浮かび、その対象が存在しない。記憶に触れようとすると、何かに弾かれるように遮断される。

「……誰ですか」

自然に出た言葉だった。

デュランタは一瞬だけ沈黙する。

「……そっか、なんでもない」

それ以上は何も言わなかった。

リリウムは、もう一度その名前を頭の中で繰り返す。ロータス。音だけが残る。意味がない。形がない。それ以上、進めない。考えれば考えるほど眩暈がしてくる。

そのまま切り捨てるように、思考を止めた。

帰路につく間も、リリウムはほとんど何も話さなかった。任務は完了している。問題はない。それでも、鎌を握る手に、わずかな違和感が残っていた。さっき流れ込んだもの、消えたはずのもの、名前だけ残ったもの。

「……あれは」

ぽつりと、言葉が漏れる。

「エネルギーじゃない気がします」

デュランタは歩きながら、少しだけ振り返る。

「んー？」

「……分かりませんけど」

それ以上は続かない。ただ一つだけ確かなことがある。あれは、ただの燃料ではなかった。

デュランタはしばらく何も言わずに歩き、それから小さく息を吐くように笑った。

「ま、ただの燃料なら、わざわざこんなことしないしね」

軽く流すような言い方だったが、その視線はほんの少しだけ鋭かった。

リリウムはそれ以上何も聞かなかった。ただ、胸の奥に残った違和感だけが、消えずに残り続けていた。それが何なのかを、まだ知らないまま。

◇　◇　◇

初任務を終えてアジトへ戻った直後、リリウムは自分の身体に起きている異変をうまく理解できていなかった。

任務中に斬った機体から流れ込んできた感情は、これまで施設内で受け取っていたものとは比べものにならないほど濃く、鮮明だった。本来であれば決して触れることのなかった他人の感情が、刃を振るうたびに身体へ流れ込み、戦闘中はそれが不思議な高揚感のようなものすら生んでいた。しかし、任務が終わって緊張が途切れた瞬間、その反動は容赦なく襲ってきた。

アジトへ続く薄暗い通路を歩いている最中だった。視界の端がわずかに揺れたと思った次の瞬間、床が急に遠くなったような感覚に襲われる。耳鳴りが響き、呼吸が浅くなり、身体の内側を誰かの感情が暴れ回っているような不快感が広がっていく。

足に力が入らない。何が起きているのか理解するより先に、身体が前へ傾いていた。

「……リーちゃん？」

背後から聞こえたデュランタの声は、妙に遠かった。

次の瞬間、リリウムの身体は完全に崩れ落ちる。

本来なら床へ叩きつけられるはずだった衝撃は来なかった。代わりに感じたのは、自分を支える細い腕と、ひどく焦った声だった。

「ちょ、待って……ほんとに無茶しすぎ……！」

霞んだ視界の中で、珍しく余裕を失ったデュランタの表情が見える。その顔を認識した直後、意識は暗闇へ沈んでいった。

次に目を覚ました時、視界に映ったのは白い天井だった。

どこかで見たことがあると思考を巡らせ、ここが葬儀屋の医療区画であることを思い出すまでに少し時間がかかった。身体は鉛のように重かったが、先ほどまで身体を焼いていた熱のような感覚は消えていた。ゆっくりと上半身を起こしたところで、視界の端に人影が映る。

ベッドのすぐ横に置かれた椅子で、デュランタが眠っていた。

ベッド脇に突っ伏すような姿勢のまま、規則正しい寝息を立てている。片手には途中まで読んでいたらしい資料が握られたままで、看病を続けているうちにそのまま眠ってしまったことが容易に想像できた。

リリウムはしばらくその姿を見つめていた。いつも軽く笑っていて、どこか掴みどころのないこの人にも、こうして無防備に眠る瞬間があるのだと、不思議な感覚になる。

起こした方がいいのか分からず数秒迷った後、リリウムは遠慮がちにその肩へ触れた。

「……デュランタさん」

反応はない。

少しだけ強く揺する。

「デュランタさん」

「……ん……」

デュランタがゆっくりと瞼を開いた。数秒ぼんやりとした後、状況を理解したらしく勢いよく身体を起こす。

「リーちゃん！？」

大きな声に、今度はリリウムの方が少し肩を揺らした。

「起きた！？　気分悪くない！？　頭痛い！？　吐きそう！？」

「……近いです」

「ごめん」

デュランタは椅子へ座り直し、大きく息を吐いた。

「ほんと、びっくりしたんだからね。　急に倒れるんだもん」

「……すみません」

「謝るところじゃないよ」

先ほどまでの慌てた様子とは違い、その声は少しだけ真剣だった。

「リーちゃんは道具じゃないんだから。　壊れるまで使わなくていい」

その言葉に、リリウムは小さく目を瞬かせる。WEEDOでは、自分の状態について考える必要がなかった。与えられた役割をこなし、指示に従い、必要とされるまま動く。それが当たり前だった。

苦しいかどうかを聞かれることもなければ、限界を自分で決める必要もなかった。だからこそ、今の言葉がうまく理解できない。

「……分かりません」

「うん、知ってる」

デュランタは苦笑する。

「だから、これから少しずつ覚えてけばいいよ」

数日後、体調が回復したリリウムは、半ば強引に外へ連れ出され移動車両に詰め込まれる。

「息抜きも大事、だからね」

「任務は……」

「今日は休み！！」

有無を言わせない勢いのまま連れて行かれた先は、大きな街ではなく、アジト近くにある小さな市場だった。

簡易的な屋台が並び、野菜や果物、衣類、機械部品まで雑多に並べられている。規模は決して大きくないが、人々の声と生活の音に満ちていた。

子どもの笑い声。焼いた食べ物の匂い。荷物を運ぶ足音。その全てが、リリウムにとっては未知だった。

白い施設では存在しなかった生活が、そこには確かにあった。

リリウムは何度も足を止め、その光景を眺めていた。

「……騒がしいです」

「正直でよろしい」

デュランタは楽しそうに笑った。

市場を歩き回り、気づけば日が傾いていた。

帰路についた移動車両の中は静かに時が流れていく。慣れない外出で疲れていたのか、リリウムはいつの間にか眠っていた。

揺れる車内。遠くなる意識。そして……

「……リーちゃん、着いたよ」

肩を優しく揺すられる。

リリウムは薄く目を開けた。

「……あと五分」

言葉が出た瞬間、自分でも何を言ったのか理解できず固まった。隣のデュランタも固まる。

数秒後、デュランタが吹き出した。

「なにそれ、私の真似？」

リリウムは小さく眉を寄せる。

「……言ってみたかっただけです」

「なにそれ可愛い」

「……先、降ります」

先に車を降りるリリウムの背中を見ながら、デュランタはしばらく笑い続けていた。

◇　◇　◇

葬儀屋に加入してから二年が経過した。

斬るという行為に、迷いはなくなっていた。距離を測り、間合いに入る前に軌道を決め、身体がその通りに動く。踏み込みの強さ、刃の角度、戻しの速度、そのすべてが一つの連続した動作として処理され、意識の介入を必要としない。かつては一つひとつ確認していたはずの工程が、今では結果だけを残して通り過ぎていく。戦闘は判断ではなく、ほとんど反射に近いものへと変わってい

た。

それでも、変わらないものがあった。

刃が対象に触れるたびに、色とともに混ざる感覚。それは長くは続かず、形も持たないまま消えていくが、完全に消えることはない。微かに残る痕跡のようなものが、どこかに引っかかり続ける。最初の頃はそれを異物として捉えていたが、今は違う。排除もせず、理解もせず、そのまま通過させる。ただの処理として受け入れている。それでも、それがただのエネルギーではないという認識だけは、二年経っても変わらなかった。

葬儀屋のアジトは、外の世界と比べれば閉じた空間だったが、その中には様々な色が存在していた。回収された感情の残滓が収められた容器、分析用の装置、雑多に並べられた機材。それぞれが異なる色を持ち、わずかに揺らめいている。静かでありながら、どこか落ち着かない空間だった。

「リーちゃん、こっち」

デュランタに呼ばれ、リリウムは視線を向ける。中央のテーブルには複数の投影パネルが展開されており、構造図とログデータが重ねて表示されていた。断片的だった情報が、一つの形にまとめられている。

「これまでの回収ログと転送履歴、全部突き合わせた結果ね」

デュランタは軽い調子のまま言うが、その目はいつもより少しだけ鋭かった。

「感情中枢コアの位置、ほぼ特定できた」

画面の一部が拡大される。複雑に入り組んだ構造の中心付近、他と比べて明らかに密度の高い領域が示されている。

「ここ。反応の集中具合と転送の終点が一致してる。外れないと思う」

説明は簡潔だった。だが、それで十分だった。

「直通ルートも開けたし、このまま行けると思う。　……ただ、」

「行く場合、リーちゃん単独で行ってもらうことになる」

周囲にいた他のメンバーも特に反応しない。驚きや反対といったものはなく、ただ事実として受け止めているようだった。

「中枢に近づくほど、感情の濃度が上がる。　あれ、普通の人だと結構きついんだよね」

「……混ざるだけじゃ済まなくなる。　引っ張られて、そのまま戻れなくなるやつもいる」

説明は簡潔だったが、十分だった。

「でもリーちゃんは違うでしょ」

視線が向けられる。

「流れてきても、処理してるだけで終わってる。　飲まれてない」

「だから適任。　……っていうか、他に行かせたくない」

最後の一言だけ、少しだけニュアンスが変わる。

「無駄に壊すの、あんま好きじゃないし」

冗談のように言うが、その意味は軽くない。

「……一人で問題ありません」

リリウムは短く答える。

人数の問題ではない。むしろ、その方が都合がいい。

混ざる感覚が強くなるほど、周囲の存在は邪魔になる。自分の中で処理できる範囲を超えたとき、それをどう扱うか分からない。

一人でいいと思った。それ以上の理由は、必要なかった。

「行きます」

リリウムは短く答える。

理由を考える必要はなかった。ここまで来て、止まるという選択だけが不自然だった。

「了解。　じゃあ準備してね。　入口の警備が出来るだけ手薄なときに突っ込むよ」

デュランタはそう言って端末を閉じる。その動作には迷いがない。二年という時間の中で、こうした判断は何度も繰り返されてきたのだと分かる。

出撃準備は短時間で整った。装備の確認も、動作チェックも、ほとんど無意識のうちに終わる。身体が覚えていることをなぞるだけで済む。

転送ポイントへ向かう途中、リリウムは一瞬だけ足を止めかける。

理由は分からない。

ただ、何かが引っかかった。

それが何なのかを探ろうとした瞬間、思考が浅いところで途切れる。深く潜る前に、自然と遮断される感覚。無理に続けようとすればできるのかもしれないが、その必要性が見つからない。

「リーちゃん？」

デュランタの声で意識が戻る。

「……問題ありません」

短く答え、歩き出す。引っかかりはそのまま残るが、それ以上広がることはなかった。

転送が完了し、視界が切り替わる。空気の質が変わる。これまでの施設とは明らかに違う、均一で密度の高い空間が広がっていた。壁面には余計な凹凸がなく、音の反響も抑えられている。整えられすぎた環境は、逆に圧迫感を生む。

「ここから先、ちょっと濃いよ」

デュランタの声が通信越しに響く。

「了解」

リリウムは鎌を構え、前へ進む。

最初の敵が出現するまで、時間はかからなかった。これまでの警備機体とは異なり、装甲も出力も一段階上がっている。動きも単純ではない。だが、処理できないものではなかった。

踏み込み、斬る。刃が触れた瞬間、これまでよりも強い感覚が流れ込む。言葉にならない断片が重なる。圧迫、拒絶、痛みのようなもの。それらが一瞬のうちに通り抜ける。わずかに、動きが遅れるが、それだけだった。

次の動作に移行し、残りの機体を処理する。思考は挟まない。挟めば遅れる。遅れれば崩れる。

「クリア」

「今の、ちょっとだけ遅れたね」

デュランタの軽い指摘が入る。

「誤差です」

短く返す。実際、その通りだった。

「ふーん」

デュランタはそれ以上は追及することはなかった。

再び前へ進む。層が深くなるにつれて、空間に含まれる色の濃度が上がっていく。視界に入るだけで圧を感じるほどに、存在感が増していく。それと同時に、混ざる感覚も変化していた。断片だったものが、わずかにまとまりを持ち始める。完全な形にはならないが、ばらばらだったものが近づいていくような印象がある。

それを理解しようとはしない。ただ、処理する。

それでも。

一瞬だけ、足が止まりかける。何かが引っかかる。

はっきりとは浮かばない。ただ、同じような感覚をどこかで経験しているという認識だけが残る。

そこから先に進もうとした瞬間、またその道は閉ざされる。

「……」

無意識に、鎌を握る手に力が入る。

「リーちゃん？」

「問題ありません」

すぐに答える。思考を切り離し、前へ進む。

「……リーちゃん、無理はダメ、だからね」

「……善処します」

止まらない。止まると、その先を見てしまう気がした。

進行は続く。敵を排除し、層を抜ける。その繰り返しの中で、違和感だけが確実に積み重なっていく。

二年前と同じもの。消えなかったもの。そして今、それはわずかに形を持ち始めていた。

それが何なのかを、まだ知らないまま。

◇　◇　◇

第九層を突破した頃には、リリウムの呼吸は僅かに乱れていた。

それは肉体的な疲労によるものではなかった。身体そのものは未だ正確に動き続けており、刃の軌道にも乱れはない。敵の挙動を読む速度も落ちておらず、戦闘能力そのものは維持されていた。

問題だったのは、ここまで積み重なり続けてきた感情の残滓だった。敵を斬るたびに流れ込んでくる感覚は層を下るごとに濃度を増し、短い断片だったはずのものが、次第に質量を持った塊のようにリリウムの内側へ沈殿していく。恐怖、苦痛、後悔、怒り、悲しみ。名前を知っているだけだったはずの感情が、今では輪郭を伴って彼女の内部に残り続けていた。

それでも、リリウムは止まらなかった。止まれば、その感覚と向き合わなければならない気がしていたし、それ以上に、ここまで来て立ち止まるという選択肢そのものが既に消えていた。

第十層へ接続される最終輸送区画へ足を踏み入れた瞬間、リリウムは僅かに視線を上げたまま動きを止める。

視界の先に広がっていたのは、これまで見てきたどの施設とも比較にならないほど巨大な吹き抜け空間だった。遥か上空も下方も視認できないほどの縦穴の中心には、円柱状の巨大エレベーターが存在しており、それを無数の黒いフレームとワイヤーが支えている。

幾重にも張り巡らされた骨組みは檻のようにも見え、その内部を巨大な昇降装置が静かに上下していた。壁面には無数の搬送レールが走り、感情を収めたコンテナが絶え間なく運搬されている。その光景は壮大というより、どこか不気味だった。世界中から奪われた感情が、本当にここへ集められているのだと理解させられる構造だった。

「……趣味が悪いですね」

エレベーターに足を踏み入れながら思わず漏れた言葉に、通信越しのデュランタが小さく笑う。

「お、リーちゃんが感想言った。　ちょっと感動してる」

軽口の直後、デュランタの声色が変わる。

「……来るよ」

エレベーター外周の暗闇が、大きく脈動した。

次の瞬間、巨大な二本の腕が暗闇の中から姿を現す。それは明らかに人間の腕を模した形状をしていたが、サイズは異常だった。装甲に覆われた巨大な拳が浮遊し、その中央後方には球体状の中枢ユニットが静かに浮かんでいる。さらに周囲の搬送レールが開放され、大量の警備機体が次々と投下された。

空間そのものが敵意で満たされる。

リリウムは息を吐き、足場となるエレベーター床を蹴った。

飛来した機体の群れへそのまま突っ込み、鎌を横薙ぎに振り抜く。金属が裂ける音が連続し、複

数の機体が同時に断ち切られる。内部から噴き出した無数の色が空中へ拡散し、暗い空間に極彩色の軌跡を描いた。

だが、敵は止まらない。新たな機体群が上空から降下し、それを処理した直後、巨大な右腕が大きく振り上げられる。

「リーちゃん右！　危ない！」

デュランタの声と同時に、巨大な拳がエレベーター床へ叩きつけられた。床そのものは特殊素材によって保護されているのか破壊されなかったが、衝撃波だけでリリウムの身体が浮き上がるほどの威力があった。体勢を崩しかけながらも、リリウムは空中で姿勢を整え、そのまま露出した腕部装甲へ斬撃を叩き込む。装甲が裂け、大量の色が噴き出した。

その直後、頭上に赤い光点が複数出現する。

上を見るより先に、本能が危険を告げていた。

巨大な拳が次々と上空から降下し、エレベーター床へ連続して叩き込まれる。避けるたびに衝撃が全身を揺らし、次の着地点を探す猶予も少ない。その猛攻が終わるより早く、今度は床全域から巨大な結晶群が突き出した。安全地帯はごく僅かしかなく、リリウムは最短距離でそこへ飛び込む。

しかし、それすら読まれていた。

安全地帯の真正面に、巨大な左腕が振り上げられていた。

回避不能だった。

直前まで積み上がっていた感情が、一気に溢れ出す。これまで押し込めてきた無数の断片が堰を切ったように流れ込み、視界が激しく明滅した。名前のない誰かの叫び、失いたくなかった何か、届かなかった何か、埋まらない空白。その全てが一瞬で押し寄せる。

リリウムの瞳は、虹色に染まっていた。

赤、青、金、紫、緑。無数の色が瞳の奥で渦を巻き、黒かった鎌からも同じ色彩が溢れ出てくる。周囲に漂っていた感情の残滓が、引き寄せられるように彼女へ収束していく光景は、異様でありながら神秘的だった。

「……これ」

初めてだった。

いや、違う。

初めて理解した。

自分が斬り続けるたびに蓄積していたものの正体を。

「……解放」

次の瞬間、世界の速度が変わる。降り注ぐ拳の軌道、結晶の発生位置、雑魚機体の侵入経路、巨大な腕の挙動、その全てが明確に見えていた。

「アッハハ……！　なにこれ……全部見える……！！」

リリウムは空中へ跳躍し、結晶群を一瞬で切り裂き、そのまま雑魚機体を一掃すると、巨大な右腕へ一直線に突っ込む。虹色の斬撃が装甲を貫き、右腕が切断される。

「足りない……もっと、もっと……！！」

狂気的な笑みを浮かべながら、続けて反転し左腕も両断する。

巨大な腕が力を失い、暗闇の中へ落下していく。中央の中枢ユニットは明確な危険を察知したのか、そのまま下層へ撤退を開始した。

静寂が戻る。

巨大な吹き抜け空間には、破壊された残骸と、漂い続ける無数の色だけが残っていた。

「……リーちゃん」

通信越しのデュランタが、珍しく言葉を失っていた。

「今の……何？」

リリウムの表情は次第に戻っていき、ゆっくりと自分の鎌へ視線を落とす。既に虹色の光は薄れ始めていたが、瞳の奥にはまだ微かな残光が残っていた。

「……分かり、ません」

そう答えながらも、リリウムは理解していた。

胸の奥に空いたままだった空白が、ほんの少しだけ確かに動き始めていることを。

◇　◇　◇

巨大エレベーターを突破して以降、リリウムの戦闘はさらに苛烈さを増していた。

『蓄積した感情を解放する』という異常な力を得たことで、リリウムの戦闘能力は明確に一段階

上の領域へ到達していた。斬撃の速度、判断能力、空間認識、その全てが以前とは比較にならない精度へ到達しており、第十一層以降に配置されていた強化個体ですら、リリウムの進行を止めるには至らなかった。

だが、その代償のように、流れ込んでくる感情はより鮮明になっていた。

以前は断片でしかなかったものが、今では明確な輪郭を持ち始めている。誰かの後悔、誰かの怒り、誰かの恐怖。斬るたびに他人の人生の欠片が流れ込み、その度に胸の奥へ沈殿していく感覚があった。

それでも進むしかなかった。

止まれば、それら全てと向き合わなければならない気がしたからだ。

第十九層を突破した直後、リリウムの視界には再び巨大空間が広がっていた。

上層で見たものとは構造が似ている。だが、役割は明確に異なっていた。無数のワイヤーフレームによって支えられた巨大な円柱型エレベーターが、遥か下方へ向かって伸びている。

壁面には無数の格納レールが張り巡らされ、その全てに感情シリンダーが格納されていた。無数の色が暗闇の中で淡く揺れ、それが延々と下層へ運ばれていく光景は、美しいというより不気味だった。

まるで、人間の感情そのものが資源としてベルトコンベアに流されているようだった。

「……まだ、こんなに」

無意識に言葉が漏れる。

通信越しのデュランタも、珍しくすぐには返答しなかった。

「……中枢に近くなってきた。　多分ここ、感情圧縮ラインの最終区画だね」

直後、空間全体が低く振動した。

格納ユニットの一部が展開され、大量のシリンダーが内部へ収納されていく。その代わりに、外周の暗闇から巨大な影が姿を現した。

まず現れたのは、二本の巨大な腕だった。

人間の腕を模した異様に巨大な機械腕。その表面は半透明のホログラム装甲に覆われており、内部の機械構造がぼんやりと透けて見えている。物理攻撃を軽減するための防御層なのだと、見ただけで理解できた。

さらに、その周囲を囲むように四基の巨大レーザー砲が展開される。砲口が赤く発光し、ゆっくりとリリウムへ照準を合わせていく。

そしてその後方には、制御中枢となる球体ユニットが静かに浮遊していた。

「……嫌な見た目です」

「安心して。　ウチも同じ感想」

軽口が終わるより早く、四方向からレーザーが放たれた。

リリウムはエレベーター床を蹴り、ワイヤーフレームへ飛び移る。熱線が通過した直後の空間は空気そのものが歪み、僅かに触れるだけでも危険だと分かった。回避した直後には巨大な右腕が振り下ろされ、衝撃波がフレーム全体を激しく揺らす。

その隙を狙うように大量の警備機体が投下された。

リリウムは空中を移動しながら雑魚機体を連続で切断し、そのまま『解放』をする。虹色に染まった瞳が、複雑に交差する攻撃軌道を正確に捉えていく。ホログラム装甲の隙間を見つけ、巨大な右腕へ斬撃を叩き込む。装甲が乱れ、内部構造が露出する。さらに追撃を加え、右腕を完全に切断した。

残った左腕が激しく暴れ、四基のレーザー砲が同時照射を開始する。逃げ場を奪うような攻撃だったが、リリウムはレーザー砲そのものへ飛び込み、一基ずつ破壊していく。最後のレーザー砲を切断した瞬間、左腕が大きく振りかぶられる。

その軌道を見た瞬間、リリウムはわずかに動きを止めた。

他の感情とは明らかに異なる、静かで穏やかな感覚が流れ込んできたからだった。

温かくて、懐かしくて、酷く遠い。

その一瞬の隙を突くように左腕が迫る。

リリウムは咄嗟に踏み込み、その腕ごと切断した。二本の腕を失ったボスは、制御中枢を守る術を失い、そのまま後退を始める。リリウムは迷わず中枢核へ飛び込み、最後の一撃を叩き込んだ。

球体ユニットが崩壊を始めた瞬間、格納されていた大量のシリンダーが外部へ次々と射出され、

床へ降り注ぐ。割れるもの、転がるもの、宙を漂うもの。その中で、リリウムの視線が一つのシリンダーに釘付けになった。

黒に近い、深い色。

見た瞬間に分かった。理由や理屈なんかじゃなく、ただ、それを知っていた。揺れ動く足場の中を駆け、そのシリンダーを掴む。

触れた瞬間、世界が、白に染まった。

ガラス越しに、外の話をしたこと。

一緒に行こうという約束したこと。

来なくなってもまた来ると信じて疑わなかった日々。

納情直前に現れ、差し出された手。

赤。

あと少しで、届かなかった距離。

冷たく響く金属音。

最後までこちらを見ていた黒い瞳。

「――ロータス」

初めて、その名前が意味を持って口から零れ落ちた。

膝が崩れ落ち、呼吸が乱れる。胸が痛む。今まで空白だった場所へ、失った感情が一気に流れ込んでくる。

悲しい。苦しい。寂しい。

そして何よりー許せなかった。

「……なんで」

震える声が漏れる。

「なんで、奪ったんですか……」

通信越しのデュランタは、しばらく何も言わなかった。

「……死体からでも、感情は採れるんだよ」

いつもの軽さはなかった。

「ローちゃんの感情も、使えるって判断されたのかな。……ほんっと、反吐が出るよね」

リリウムは震える手でシリンダーを握り締める。

「……ロータスは」

喉が震える。

「あなたにとって、何だったんですか」

長い沈黙のあと、デュランタが小さく笑った。

「……優しすぎた人」

その一言に、後悔が滲んでいた。

「助けられなかった」

短い言葉だった。続けて、ぽつりぽつりと独り言のように話し始める。

「やっぱりさ、こんな危ないことしてる組織だからどうしてもお別れはあるんだよ」

「……それでも、私がリーちゃんを助ける瞬間にもう少し警戒していれば、ローちゃんはこんなことにはならなかったかもしれない」

「あのとき周囲の情報をもう少しちゃんと見ていれば、とか。　いつどこから撃たれるか分からないから警戒してって言っておけばよかった、とか」

「今思い返しても後悔ばっかり。　……でも、葬儀屋来てからのローちゃんの目的はずっと『どうなってでもLI-6891さんを助け出すこと』だったからさ」

「ローちゃんは、リーちゃんのことすーっごい大切に思ってたみたいだし。　せめてこの子だけは救わなきゃって思って」

「……ごめんね、リーちゃん。　私のせいだ」

泣きそうな声で、デュランタは言葉を紡ぐ。

「謝らないでください」

リリウムは、手の中のシリンダーを見つめたまま静かに言った。透明な容器の中で揺れる色は穏やかだった。だが、それに触れた瞬間に流れ込んできた記憶は、今も胸の奥で鮮明に疼いている。

会いたかった。もっと話したかった。一緒に外を見たかった。

生きていてほしかった。

そんな感情が次々と浮かび上がり、自分の中で整理しきれないまま渦を巻いていた。

「……さっきまで、分かりませんでした」

リリウムはゆっくりと言葉を探す。

「悲しいのか、苦しいのか、寂しいのか……怒っているのか」

胸に手を当てる。鼓動がうるさいほど早かった。

「でも、もう会えないって思った時」

喉が僅かに震える。

「もっと一緒にいたかったって、思いました」

「……こういうのを、多分」

リリウムは小さく息を吐く。

「『好き』って言うんだと思います」

通信越しに、デュランタが息を呑む気配がした。

リリウムは少しだけ視線を上げる。

「……でも」

「？」

「デュランタさんのことも、大切です」

言葉を選ぶように、ゆっくり続ける。

「助けてくれました。　居場所をくれました。　色々なことを教えてくれました。……一人じゃないと、思わせてくれました」

今度はロータスの時とは違う温度の感情が、胸の中に確かに存在していた。

安心。信頼。救われたという実感。

それもまた、失いたくない感情だった。

「これが何という感情なのか、まだ上手く分かりません」

リリウムは小さく首を横に振る。

「でも」

今度ははっきりと言う。

「デュランタさんのことも、失いたくありません」

通信越しで、デュランタが完全に黙り込む。

しばらくして、小さく笑う声が聞こえた。

「……参ったなぁ」

その声は、明らかに泣きそうだった。

「そのタイミングでそれ言うの、ずるいって」

通信越しに、しばらく何の音も返ってこなかった。

警報だけが無機質に鳴り響き、遠くでは巨大な金属構造物が崩れ落ちる轟音が断続的に響いている。足元では亀裂がゆっくりと広がり、格納レールから切り離されたシリンダーが次々と落下し、割れた容器から溢れ出した色が暗い空間を漂っていた。

それでも、その場だけ時間が止まったようだった。

このシリンダーを手放したくない。

今までであれば、迷いもなく取り込んでいたのだろう。ただ、自分の中へ取り込む未来を想像した瞬間言いようのない恐怖が胸を掠める。これを使えば、ロータスという存在を自分の中で消費してしまうのではないかという感覚があった。力として扱うことそのものに、強い拒絶感があった。

周囲では未だに崩壊が進んでいる。足元には亀裂が走り、遠くでは巨大な金属構造物が崩れ落ちる轟音が響いていた。それでも、リリウムの時間だけが切り離されたように遅く流れていた。

「……これは、どうすればいいんでしょうか」

気づけば、そんな言葉が零れていた。

助けを求めるような言葉を口にしたのは、いつぶりだったのか分からない。自分でも驚くほど弱い声だった。

通信越しのデュランタは、すぐには答えなかった。普段なら軽口の一つでも返してくるはずなのに、しばらく沈黙だけが続く。

「……多分、かなり特殊な状態なんだよね」

ようやく返ってきた声は、いつもよりずっと静かだった。

「普通の感情シリンダーって、特定の個人を特定なんてできないんだよ。……それは、ほとんど人格に近い」

「ロータスの意思が強かったからこそ、なのかもしれないね」

リリウムは、何も答えられなかった。

ロータスという名前を頭の中で繰り返すたびに、胸の奥で何かが軋む。嬉しいわけではなかった。悲しいだけでもなかった。言葉にできない感情が混ざり合い、自分でも整理ができない。

ただ一つだけ、はっきりしていることがある。これを、自分のためだけに使いたくなかった。

ロータスの命とも呼べるようなものを、ただの戦うための燃料として扱うことだけは、どうしてもできなかった。

リリウムはゆっくりと息を吸い、震える指先に力を込める。

「……預かってもらえますか」

短い言葉だったが、それを口にするまでに想像以上の時間がかかった。

通信越しに、デュランタが僅かに息を呑む気配が伝わる。

「……いいの？」

「今の私が持っていたら、多分……」

戦えなくなる。壊れる。失う。

様々な言葉が浮かんでは消えていく。

「……また、失くしそうで」

絞り出した言葉は、自分でも驚くほど素直だった。

沈黙が落ちる。

その沈黙を破ったのは、遠くで崩れ落ちる金属音だった。

「……そっか」

デュランタの声は、驚くほど優しかった。

近くを飛行していた葬儀屋の支援ドローンが静かに降下し、機体下部の保管ユニットを展開する。小さな格納ケースの内部には衝撃吸収材が敷かれており、それが妙に丁寧に見えた。

リリウムは、壊れ物を扱うようにゆっくりとシリンダーをそこへ収める。

指先が離れる瞬間、胸の奥が強く引き裂かれるような感覚が走ったが、手を戻すことはしなかった。

「……絶対に、失くさないでください」

声はわずかに震えていた。

通信越しのデュランタは、短く答える。

「うん」

その返答には、今まで聞いたことがないほど強い意志があった。

「ちゃんと、預かるね」

その言葉が、未来に何を残すのかをリリウムはまだ知らない。

ただ、胸の奥にあった空白はもう消えていた。

そこに残っていたのは、明確な喪失と、消えることのない痛みだった。

そしてその痛みを抱えたまま、リリウムは再び下層へ続く道へと歩き出した。

◇　◇　◇

二十層を突破して以降、リリウムはほとんど休息を取ることなく下層へ進み続けていた。

層が深くなるにつれて警備機構の性能は明らかに上昇していた。装甲強度は増し、攻撃の精度は高まり、単体性能だけでなく連携能力まで強化されている。以前のリリウムであれば確実に苦戦していたはずの相手だったが、今の彼女にとってそれらは時間を奪う障害以上のものではなくなっていた。

極彩解放を発動した瞬間、世界の見え方そのものが変わる。敵の軌道、攻撃の予兆、死角、次に

取るべき最適な行動。それらが思考より先に視界へ流れ込み、身体がそれに追従する。斬り、避け、踏み込み、また斬る。その一連の流れは、もはや訓練された技術というより本能に近い領域へ達していた。

二十一層。

二十四層。

二十六層。

進行速度は、葬儀屋が当初想定していたものを大きく上回っていた。

しかし、その速度に比例するように、リリウムの内側では別の問題が静かに膨れ上がっていた。

敵を斬るたびに流れ込んでくる感情は、もはや単なる断片ではなかった。誰かの人生の終わり際だけを無理やり濃縮したような感情が、刃を振るたびに身体の内側へ流れ込んでくる。恐怖、怒

り、愛情、後悔、執着、絶望。そのどれもが生々しく、時折それが自分の感情なのか他者のものなのか判別できなくなる瞬間すらあった。

ロータスを失った悲しみも、デュランタを失いたくないという感情も、その膨大な濁流の中に飲み込まれそうになることがあった。それでも、リリウムは止まらなかった。立ち止まれば、自分という輪郭そのものが曖昧になってしまう気がしたからだ。

第二十七層を突破した直後、通信機から微かなノイズが走った。

「……リーちゃん」

デュランタの声だったが、いつもより不自然に掠れていた。

「まだ、いける？」

「問題ありません」

短く返した直後、通信が大きく乱れる。激しいノイズの中に、途切れ途切れの声が混じった。

『――もし、ウチが――』

そこで通信は途切れた。

リリウムは足を止め、無意識に通信機へ触れる。

「……デュランタさん？」

数秒後、再び通信が繋がる。

「ごめんごめん、下層って通信環境最悪だねぇ」

いつもの軽い声だった。

だが、先ほど聞こえた言葉だけが妙に耳に残った。続きを聞くべきなのか判断できないまま、リリウムは再び前へ進む。

第二十八層には、異様な静けさがあった。

警備を倒した後に広がっていたのは、巨大な研究施設だった。無数の培養槽が並び、砕かれた実験ポッドが床に散乱し、用途不明の装置群が薄暗い空間に沈んでいる。壁面には夥しい数の観察記録が刻まれており、その中心には感情を失った人型の被験体が無造作に積み重ねられていた。

それは死体というより、廃棄物に近かった。

人として扱われた痕跡が、どこにも存在しない。

その光景を前にしても、リリウムはすぐには言葉を失わなかった。ただ、自分が立っている場所がどれほど歪んだ思想によって作られたものなのかを、改めて理解させられていた。

空間の最奥には、一つだけ稼働を続ける端末があった。リリウムが触れた瞬間、映像が起動する。

『感情中枢コア計画、最終段階へ移行』

『感情保存効率向上のため、適合個体の選定を開始』

『被験体 LI-6891 適合率、過去最高値』

表示された番号に、リリウムの身体が僅かに硬直する。

画面が切り替わった。

そこに映っていた人物を見た瞬間、リリウムの呼吸が浅くなる。

デュランタだった。

正確には、今の彼女とはどこか違う。表情には温度がなく、声には感情の揺らぎが存在しない。

『感情は非効率だ』

『だから人は不完全になる』

『保存し、管理し、必要な時に再利用する。それこそが人類の最適解だ』

映像が途切れる。

直後、研究区画中のモニターが一斉に起動した。

無数の画面に映し出された視線が、まるでこちらを観察しているようだった。

『ようやく来た』

人間とも機械ともつかない声が空間全体に響く。

『キミのような無限の存在を待ち望んでいたよ、LI-6891』

『感情を取り込んでもなお壊れず、むしろ無限に放出される。キミこそ完成形だ』

リリウムは静かに鎌を構える。

「……違います」

『何が違う？』

問われ、リリウムはすぐに答えられなかった。

ロータスの記憶。

デュランタとの時間。

葬儀屋で得た居場所。

失ったもの。

守りたいもの。

その全てが胸の中に存在していた。

「……私は」

呼吸を整える。

「あなたのための器じゃない」

数秒の沈黙の後、声は静かに笑った。

『……まぁいい。　どのみちキミの目的は感情中枢コアなのだろう？』

『待っているよ、最下層で』

◇　◇

葬儀屋のオペレーション室では、デュランタが床に膝をついていた。

呼吸は乱れ、視界は大きく揺れ、頭の奥では自分ではない声が何度も響いている。まるで脳を内側から掻き回されるような痛みに、立ち上がることすら困難だった。

視線の先には、ロータスのシリンダーが保管されたケースが置かれている。

デュランタはそれを見つめたまま、震える手を伸ばしかけて止めた。

「……まだ」

掠れた声が漏れる。

「まだ、早い」

リリウムはまだ戦っている。

ここで倒れるわけにはいかなかった。デュランタは歯を食いしばり、自分の意識を繋ぎ止め続けた。

◇　◇

第二十九層を突破した先に広がっていたのは、これまで何度も見てきた巨大エレベーター区画だった。

だが、それは過去のどの層とも決定的に違っていた。視界の先には巨大な円柱型の昇降装置が存在している。無数のワイヤーフレームによって支えられたその構造自体は、第十層や第二十層で見たものと酷似していた。

しかし、その周囲には何もない。エレベーターの外側には、ただ果ての見えない暗闇だけが広がっている。

上を見上げても何も見えない。下を覗き込んでも、底は存在しない。光すら飲み込むような黒が、ただ静かにそこにあった。

機械音すらなく、自分の呼吸音だけが、異様なほど大きく聞こえる。この場所だけが、WEEDOという巨大施設から切り離されてしまったような錯覚があった。

あるいは、ここから先にあるものが既存の構造すら必要としない領域なのかもしれなかった。

リリウムは通信機へ触れる。

「……デュランタさん」

返答はなかった。

代わりに、激しいノイズだけが耳に流れ込む。

「……デュランタさん？」

再び呼びかける。

しばらくして、途切れ途切れの声が返ってきた。

『―リー……ちゃん……』

酷く掠れた声だった。

『……ごめ……ね』

それだけを最後に、通信は途切れ、無機質なノイズだけが残る。

リリウムはしばらくその場に立ち尽くしていた。

胸の奥で、嫌な予感だけが静かに広がっていく。

だが、止まることはできなかった。もう何も失いたくはない。

リリウムは静かに鎌を握り直し、巨大エレベーターへ足を踏み入れる。

重い駆動音と共に、足元の床がゆっくりと下降を始めた。

果ての見えない暗闇の中へ。

世界の底へ向かうように。

◇　◇　◇

巨大エレベーターは、果ての見えない暗闇の中を静かに降下し続けていた。

光すら飲み込んでしまいそうな黒が、上下左右の感覚すら奪うほど無限に広がっていた。上を見上げても、自分が降りてきた施設の灯りは既に見えない。下を覗き込んでも終わりはなく、この世界には底という概念そのものが存在しないのではないかと錯覚するほどだった。

機械音すらほとんど聞こえない静寂の中で、ノイズしか聞こえなかった通信機から、荒い呼吸音が響く。

「……リー、ちゃん」

デュランタの掠れた声が耳に入る。いつもの軽さはなく、言葉を発するだけでも消耗していることが伝わってくる。

「デュランタさん！　平気、なんですか」

「へーき……って言いたいけど、ちょっと厳しいかも」

今にも消えてしまいそうな、途切れ途切れの声。

「……リーちゃん、この先で中枢コアが出てきたら……迷わず壊して」

リリウムは僅かに眉を寄せる。

「……理由を聞いてもいいですか」

短い沈黙。

「……いやー、ウチ、多分もう長くないんだよね」

苦しそうな呼吸音が混じる。

「中にいるあれを……抑えきれない」

直後、通信機に激しいノイズが走った。

『壊す必要などない』

研究区画で聞いた、あの無機質な声だった。感情を排したような平坦な声色でありながら、その奥には異様な執着が滲んでいた。

『キミは完成形だ』

『感情を受け止め、保存し、管理するための最適な器』

『ほら、こっちにおいで』

ノイズの向こうで、デュランタの苦しそうな声が割り込む。

「……来ちゃ、ダメ」

途切れ途切れの声だった。

「お願いだから……壊して」

通信はそこで途切れた。

残されたのは、再び暗闇だけだった。

リリウムは返す言葉を持てないまま、ただ前を見つめ続けていた。

壊せば終わる。デュランタは救われるかもしれない。けれど、それは本当に終わりなのかという疑問だけが、胸の奥に小さな棘のように残り続けていた。

その時、巨大エレベーター全体が激しく振動した。

静寂に沈んでいた暗闇の中に赤い光が次々と灯り、その光は獲物を見つけた捕食者の眼のようにゆっくりとこちらへ向けられていく。

巨大な両腕がエレベーター外周を掴むように姿を現し、その背後では六基のレーザー砲が展開された。第十層、第二十層で戦った防衛機構をさらに強化したような異形でありながら、その威圧感は比較にならないほど強かった。

エレベーターは降下を止めない。揺れ続ける足場、果てのない暗闇、落下すれば終わりという極限の状況の中で、六方向から放たれたレーザーが空間を焼き払い、巨大な拳が叩きつけられるたび

に足場全体が悲鳴を上げるように軋んだ。さらに大量の警備機体が雨のように降り注ぎ、リリウムの逃げ場を徹底的に奪おうとする。

リリウムは地面を蹴り、流れるように移動しながら攻撃を躱し続けた。敵を斬るたびに、怒り、恐怖、悲しみ、絶望といった感情が濁流のように身体へ流れ込んでくる。それは相変わらず重く、苦しく、油断すれば飲み込まれそうになるほど濃密だったが、以前のように足を止めることはなかった。

「……もう、慣れました」

小さく零した声は、自分に言い聞かせるようでもあった。

「あなたたちの痛みも、苦しみも……私が全部連れていきます」

虹色に輝く瞳が暗闇を裂く。

迫るレーザー砲へ自ら踏み込み、一基を切断し、その勢いのまま巨大な右腕を斬り裂く。砕け散る金属片を足場代わりに跳躍しながら雑魚機体をまとめて薙ぎ払い、最後に残った左腕へ全力の一撃を叩き込んだ瞬間、防衛機構は悲鳴のような駆動音を響かせながら、そのまま果ての見えない暗闇の底へ落下していった。

それとほぼ同時に、長く続いていた暗闇が途切れ、視界が一気に白へ塗り潰される。

突然開けた光景に、リリウムは思わず息を呑んだ。

そこに広がっていたのは、これまで見てきた無機質な施設とはあまりにもかけ離れた空間だった。

空のように高い天井、無数に浮遊する巨大な結晶、極彩色の光を反射するステンドグラスの壁面。その中心では、太陽のような核を抱きながら巨大な翼を幾重にも広げた存在が静かに浮遊して

いた。

それは一瞬、鳥のようにも見えた。

天使のようにも見えた。

あるいは祈りや感情そのものが、歪んだまま神格化された存在にも見えた。美しいと感じるほど神秘的でありながら、本能的な恐怖を掻き立てる異様さがあった。

『排除』

無機質な機械音声が響いた直後、巨大な翼が展開され、無数の光刃が雨のように降り注ぐ。床が砕け、結晶が爆ぜ、空間そのものが切り裂かれていく。リリウムは咄嗟に回避するが、頬を掠めただけの光で皮膚が焼ける。さらに周囲には無数の分身体が現れ、本体と見分けがつかないまま一斉に襲いかかってきた。

リリウムはひたすら斬り続けた。分身体を切り裂いても次々と再生し、地面からは巨大結晶が突き上がって逃げ道を奪い、上空からは極太の光線が降り注ぐ。呼吸を整える暇すらなく、身体は悲鳴を上げ、視界は徐々に赤く染まり始めていく。それでも膝をつかなかったのは、脳裏に浮かぶ二人の存在があったからだった。

ロータスの穏やかな笑顔。デュランタの不器用な優しさ。

「……まだ」

荒い呼吸の中で、リリウムは無理やり身体を起こす。

「まだ、終われない」

巨大な本体へ真正面から踏み込み、翼を斬り裂き、結晶を砕き、何度吹き飛ばされても再び立ち上がる。そして、最後に残された太陽のような巨大核へ鎌を叩き込んだ瞬間、空間全体が静止したような感覚が訪れた。

巨大な翼が崩れ落ち、眩い光を放っていた核が砕け散る。

その直後、背後から凄まじい衝撃音が響き、振り返った先には葬儀屋のロゴが刻まれた巨大兵器が投下されていた。

デュランタが事前に用意していた最後の切り札だった。展開された巨大砲台が中央の繭へ照準を固定するが、それを阻むように無数の敵が押し寄せてくる。

リリウムは静かに深く息を吸い、鎌を握り直した。

「……守ります」

その声は不思議なほど静かだった。

「今度こそ、全部」

押し寄せる敵を斬り続け、ロータスが守ろうとした未来も、デュランタが託した希望も、自分がここまで辿り着いた意味も全て背負ったまま最後の一体を斬り裂いた瞬間、巨大砲台が発射される。白い閃光が世界を埋め尽くし、巨大な繭が音を立てて崩壊した。

そして、その内部から巨大な球体が静かに姿を現した。

無数の感情が内部で渦巻いている。怒り、悲しみ、愛情、執着、絶望。世界中から奪われた感情の全てがそこに集約されていた。

沈黙していた通信機が再び鳴る。

「……リーちゃん」

掠れきったデュランタの声だった。

「……壊して。　それを壊せば、全部終わる」

呼吸は乱れ、今にも消えそうだった。

直後、別の声が割り込む。

『壊す必要はない』

『君は私と一緒になるべきだ』

『君となら、この世界を最高のものにできる』

球体が脈動する。

リリウムは静かにそれを見つめていた。

壊せば終わるかもしれない。だが、デュランタの言葉から理解できる。

壊せば『どちらのデュランタ』も死ぬ。

このコアを破壊すれば『今まで一緒にいたデュランタ』は犠牲となり、『コアとして生きるデュランタ』は消滅し感情をエネルギーにする機構は全て停止する。世界に色を、感情を取り戻せる。

それは、本当に救いなのだろうか。

ロータスの最期が脳裏を過る。

デュランタの笑顔が浮かぶ。

ようやく知った感情を、また失う未来だけは選びたくなかった。

リリウムはゆっくりと鎌を下ろす。

「……嫌です」

デュランタが息を呑む。

「リーちゃん……！」

「私は、もう誰かを切り捨てる終わり方は選びません」

そう言って、リリウムは巨大な球体へ歩き出した。

『そうだ』

『それでいい』

歓喜するような声が響く。

デュランタの悲鳴に近い叫びが響いた。

「ダメ！！」

それでもリリウムは止まらなかった。

巨大な感情中枢コアへ手を伸ばす。

触れた瞬間、無数の感情が雪崩のように流れ込んできた。

世界が崩れる。

視界が極彩色に染まる。

意識が深い場所へ沈んでいく。

最後に聞こえたのは、泣きそうなデュランタの声だった。

◇　◇　◇

意識が浮上した瞬間、リリウムは自分がどこに立っているのか理解できなかった。

上下の感覚は曖昧で、身体が地面に立っているのか、宙に浮いているのかさえ判別できない。視界一面には白が広がっているはずなのに、それは決して無垢な白ではなく、無数のノイズと歪みを

孕んだ不安定な世界だった。足元には辛うじて床と呼べるワイヤーフレーム状の地面が広がっているが、その先はどこまでも白い霧のような光に飲み込まれている。

遠くでは幾何学的なオブジェクトが断続的に生成と崩壊を繰り返し、砕けた感情シリンダーの残骸が重力を無視するように宙を漂っていた。その光景は、現実世界のWEEDO施設を記憶だけで再構築し、それを途中で壊したような異様さを持っていた。

耳を澄ませば、無数の声が聞こえる。泣き声、怒号、笑い声、誰かを愛する声、助けを求める悲鳴。その全てがノイズ混じりに重なり合い、言葉として認識できる直前で崩れていく。世界そのものが感情の墓場になってしまったかのようだった。

リリウムはゆっくりと身体を起こし、呼吸を整えようとした。しかし胸の奥では、他人の感情が未だに濁流のように流れ続けている。怒り、悲しみ、孤独、執着。それらが自分の感情と混ざり合い、自分という輪郭を少しずつ曖昧にしていく感覚があった。

「ようこそ」

静かな声が、真後ろから響いた。

振り返った瞬間、リリウムは息を呑む。

そこに立っていたのは、人間だったものの残骸のような存在だった。

全身は黒いノイズで構成されており、輪郭は常に崩れ続けている。砂嵐のような粒子が人型を無理やり維持しているような姿だった。それでも、長い髪の輪郭、細い身体のシルエットだけで、それがデュランタであると理解できてしまった。

顔すら明確ではない。

ただ、黒い空洞のような瞳だけがリリウムを見つめていた。

「……デュランタ、さん」

「違うよ」

即座に否定される。

その声は穏やかだったが、どこまでも冷たかった。

「私は、キミが知っている彼女じゃない」

「私はこの世界を維持するために最適化された意思。　不要な揺らぎを切り離した、合理性そのものだ」

彼女が一歩踏み出すたび、白い空間に黒いノイズが走り、周囲の景色が変質していく。

目の前に映し出されたのは、幼い少女だった。

まだ幼いデュランタが、研究者だった父の背中を追いかけ、優しく笑う母親に抱きしめられている。温かな記憶は一瞬で崩れ去り、次に映し出されたのは血に濡れた事故現場だった。白い布を被せられた母親の亡骸の前で、幼いデュランタが声も出せずに泣き崩れている。

「母は働いて死んだ」

黒いデュランタは、その映像を感情のない目で見つめていた。

「私の学費を稼ぐために、未来を与えるために、働き続けてその途中で死んだ」

映像はさらに切り替わる。

研究室。積み上げられた論文。膨大な失敗実験。感情の抽出。エネルギーへの変換。

そして、WEEDOの設立。

感情を抜き取られ、安定した生活を送る人々。

「だから私は考えた。　誰も働かなくていい世界を作ればいい」

「……誰も苦しまず、失わなくていい世界を作ればいい」

白い空間に無数の人々の顔が浮かぶ。皆、穏やかに笑っていた。けれどその笑顔には、喜びも悲しみも宿っていなかった。

「感情は人を苦しめる。　失う痛み、怒り、悲しみ、記憶も……全て不要だ」

黒い瞳が、まっすぐリリウムを射抜く。

「キミは知っているはずだ。　感情があるから苦しい。　感情があるからロータスは死んだ」

「感情があるから、キミは今も苦しんでいる」

次の瞬間、空間が激しく歪んだ。

ロータスが目の前で倒れる。

血が広がる。

白い実験施設。

記憶を失った自分。

デュランタが消える未来。

何度も何度も喪失だけが繰り返され、その度に胸の奥を抉られる。

リリウムは膝をついた。呼吸が浅くなり、視界が滲む。身体が重く、立ち上がることすらできない。

「苦しいだろう？」

黒いデュランタが静かに手を伸ばす。

「なら、捨てればいい」

白い床が崩れ、無数の手がリリウムを引きずり込もうとする。ロータスも守れなかった。デュランタも守れない。また失う。また何もできない。そう思うと、抵抗する力が抜けかけた。

――刹那、崩れかけていた白い世界を、鮮やかな翠色の光が一直線に切り裂いた。

空間を覆っていたノイズが一瞬だけ押し退けられ、無数の黒い手が弾け飛ぶ。リリウムの身体を沈めようとしていた黒い泥のような感情も、その光に触れた瞬間だけ動きを止めた。

「……LI-……リリウムさん、助けに来ました」

聞き慣れた声の、聞き慣れないセリフ。

リリウムがゆっくりと顔を上げる。

そこに立っていたのは、デュランタだった。

いつもとは少し違う、優しい笑み。その姿は決して無事とは言えなかった。身体の輪郭は所々ノイズに侵食され、ホログラムのように明滅している。それでも、その瞳だけははっきりとした翠色の光を宿していた。

そして、その胸元では別の色が静かに揺れていた。

黒。ただ、どこか温かみを感じた。

リリウムは目を見開く。

「……それ」

デュランタはいつもの表情に戻り、少しだけ困ったように笑った。

「怒らないでね」

軽い口調とは裏腹に、その声は僅かに震えていた。

「預かるだけのつもりだったんだけどさ……ちょっと予定変更」

胸元の淡い黒色の光が、鼓動のように脈打つ。

「私の中にローちゃんを入れた」

その短い言葉だけで、リリウムには理解できた。

あのシリンダー。ロータスが最後に残した感情。デュランタは、それを取り込んでここまで来たのだ。

胸の奥が強く揺れる。怒りでも悲しみでもない、言葉にできない感情だった。

「……どうして」

絞り出すような声だった。

デュランタは、いつものように肩を竦める。

「リーちゃん助けるため」

あまりにも単純で、あまりにも彼女らしい答えだった。

「それにさ」

デュランタは一瞬だけ目を伏せる。

「ローちゃんが命懸けで残したものを、今度は無駄にしたくなかったから」

その言葉に、リリウムは何も返せなかった。

黒いノイズで構成されたデュランタ裏の身体が、大きく揺らぐ。

「……非合理だ」

空間全体が激しく軋んだ。

次の瞬間、無数の黒いノイズ塊が空中に生成される。それらは槍のように鋭く変形しながら高速で射出され、白い世界そのものを汚染していった。

デュランタが叫ぶ。

「っ！　よけて！！」

リリウムが咄嗟に回避する。

ノイズ弾が足元へ着弾した瞬間、床が腐食するように崩壊し、周囲に漂っていた感情の色が吸い取られていく。

直撃した感情残滓は一瞬で白く濁り、何も残らず消えていった。

「……感情を」

リリウムが息を呑む。

「奪ってる……」

「多分、当たったらリーちゃんの感情ごと持ってかれる」

デュランタは翠色の弾丸を放ちながら駆ける。

「だから、絶対避けて」

次々と飛来する黒いノイズ弾を、リリウムは斬り裂きながら前へ進む。しかし斬ったはずのノイズは霧のように再形成され、今度は巨大な波となって二人へ襲いかかった。

リリウムが波を切り裂き、デュランタが生まれた隙へ射撃を叩き込む。

二人は背中を預け合いながら、崩壊し続ける足場を飛び移り、無数の攻撃を捌き続けた。

「右！」

「見えてます！」

巨大な黒い刃が振り下ろされる。

リリウムが受け止める。

その隙にデュランタが中心核へ飛び込み、至近距離から攻撃を叩き込む。しかし直後、放たれたノイズ弾がデュランタの脇腹を掠めた。

「っ……！」

翠色の光が大きく乱れ、デュランタの身体を侵食していた黒いノイズがさらに広がる。右腕の先が一瞬崩れ、粒子のように零れ落ちた。

明らかに、長くは保たない。

それでもデュランタは無理やり笑った。

「……ほんと、しつこいねぇ」

リリウムは即座に踏み込む。

「デュランタさん！」

「……平気、行くよ！」

明らかに平気ではなかった。

それでもデュランタは笑う。

「リーちゃん守るって決めたから」

その言葉に、リリウムの瞳が強く揺れた。

次の瞬間、二人は同時に踏み込む。

リリウムの斬撃が黒い身体を裂き、デュランタの一撃が中心部を撃ち抜いた。

黒いノイズの身体に、大きな亀裂が走った。

激突の果てに、黒いデュランタの身体は霧のように消滅していく。

黒い霧が晴れたかと思うと、そこには小さな少女が泣いていた。

母親を失ったあの日から、ずっと時間が止まったままの幼いデュランタだった。

崩れ落ちた黒いノイズの奥で、少女は小さく身体を震わせながら泣き続けていた。世界を維持しようとしていた巨大な意思とは思えないほど、その姿はただの弱い子どもだった。

リリウムは静かに歩み寄る。

少女は怯えたように後ずさろうとするが、逃げ場はどこにもなかった。

「……全部、なくしたくなかっただけなんですね」

少女は何も答えず、ただ壊れたように泣き続ける。

リリウムはゆっくりと手を差し伸べた。

「もう、一人で頑張らなくていいです」

その瞬間、少女の瞳が大きく揺れる。

だが次の瞬間、差し伸べられたリリウムの手の隣に、もう一つの手が静かに伸びた。

デュランタだった。

身体の崩壊はさらに進み、指先はノイズ混じりに崩れかけている。それでも彼女は、いつものように少し困ったような笑みを浮かべていた。

「……ほんと、頑張りすぎなんだよ。『私』」

幼い少女が顔を上げる。

目の前に立つ未来の自分を見て、言葉を失っていた。

デュランタはゆっくりと膝をつき、少女と目線を合わせる。

「もう大丈夫」

震える声だった。

「今は、ちゃんと隣にいてくれる子たちがいるから」

それぞれの光が、静かに少女を包み込んでいく。

幼いデュランタは堪えていた涙を溢れさせながら、震える手を伸ばした。

瞬間、世界は眩い光に包まれていった。

◇　◇　◇

最初に感じたのは、柔らかな温度だった。

硬い金属床でも、崩れかけた施設の瓦礫の上でもない。身体を包み込む柔らかな感触と、微かに薬品の匂いが混じった空気に、リリウムはゆっくりと意識を浮上させていった。

重たい瞼を開くと、見慣れない白い天井が視界に映る。いや、正確には見慣れていた。葬儀屋のアジトにある医療区画だった。

ぼやけた視界が少しずつ鮮明になっていく。

窓の外からは人の話し声が聞こえる。誰かが走る足音。機械音。遠くで何かを運搬している音。

世界は、まだ動いていた。

リリウムはゆっくりと上半身を起こした。

身体は重かったが、動かないほどではない。

そこでようやく、自分が生きて戻ってきたのだと理解する。

そして同時に、一つの疑問が胸を貫いた。

「……デュランタさん」

部屋を見渡すが、誰もいない。

胸の奥が、嫌な音を立てた。

精神世界で共に戦った光景はあまりにも鮮明だった。あれが夢だったとは思えない。だが、最後に見たデュランタの身体はノイズに侵食され、今にも崩れそうだった。

嫌な想像だけが膨らんでいく。

リリウムは点滴を乱暴に外し、ベッドから降りた。

直後、部屋に入ってきた葬儀屋のメンバーが目を丸くする。

「え、ちょっと！？　まだ安静ー」

「デュランタさんは」

普段より明らかに強い声だった。

相手が一瞬言葉を詰まらせる。

「……え、えっと……あっちだよ……？」

「ただ、まだ寝てると思う。　オペレーション室の隣で休ませてるけどー」

最後まで聞かず、リリウムは走り出していた。

廊下を駆け抜ける。何人もの葬儀屋メンバーとすれ違う。

WEEDO崩壊後の混乱で、誰もが忙しなく動いていた。運び込まれる物資、救助要請、各地の状況報告。世界は確実に変わり始めていた。

けれど今のリリウムにとって、それらはどうでもよかった。

失いたくない人が、まだそこにいるか。

それだけだった。

目的の部屋の扉を勢いよく開ける。

そしてーリリウムは固まった。

デュランタは、寝ていた。

ベッドの上で、信じられないほど無防備な姿で眠っていた。口が少しだけ開いており、布団も半分蹴飛ばしている。

「……」

リリウムは数秒、無言で立ち尽くした。

さっきまでの緊張感が、急速に別の感情へ変わっていく。

「……何してるんですか」

返事はない。近づき、肩を軽く揺する。

「起きてください」

少し強めに揺するも反応はない。

「デュランタさん」

「……あと五分……」

間違いなくデュランタだった。

リリウムはその場で座り込みそうになる。

「……よかった」

掠れた声が漏れる。

涙が出そうになるのを堪えながら、再び肩を揺する。今度はデュランタがゆっくりと目を開けた。

「……あ、リーちゃん」

いつもの気の抜けた笑み。本当に、生きていた。

リリウムが何かを言おうとした、その時だった。

「……あまり乱暴に起こさないであげてください」

柔らかく穏やかな声。

リリウムの動きが止まる。デュランタ自身も固まっている。

「……え」

「……え？」

デュランタが自分の喉に触れる。

「ちょ、今の私じゃない」

「あなたです」

「いや違うって」

次の瞬間、困ったような穏やかな笑みが浮かぶ。

「……お久しぶりです。　えっと……リーちゃん？」

その声に、リリウムの呼吸が止まった。

「……ロータス」

「完全に戻れたわけではないんですけどね」

ロータスは少しだけ困ったように笑う。

「どうやら、かなり中途半端な形で残ってしまったみたいです」

「中で急に増えてさぁ……」

デュランタの口調に戻る。

「頭の中ずっと賑やかなんだよね」

「あなたが騒がしいだけです」

「えぇ……」

あまりにもいつも通りではないやり取りに、リリウムはしばらく言葉を失っていた。

けれど、本当に失ったと思っていた人が、確かにそこにいた。

完全な形ではなくても。

それでも、確かに。

リリウムの瞳から静かに涙が零れる。

「……ずるいです」

二人が同時に首を傾げた。

「勝手にいなくなって……勝手に戻ってきて」

声が震える。

一瞬の静寂のあと。

「ごめんね」

「申し訳ありません」

二人の声が重なる。

リリウムは泣きながら、小さく笑った。

WEEDO崩壊後、世界は大きく変わった。

感情回収システムを失った都市は混乱し、人々は失っていた感情を取り戻し、その重さに戸惑いながらも少しずつ前へ進み始めていた。葬儀屋もまた、各地の救助活動と復興支援に追われていた。

苦しみは消えない。悲しみも、怒りもなくならない。

それでも、それらを失った世界よりはきっと前に進める。

リリウムはそう思えた。

ある日の帰り道。

リリウムは足を止め、空を見上げた。

青、白、橙。

かつては認識すらできなかった色が、世界には溢れていた。

「……空って、こんなに色があったんですね」

「今さら？」

「リーちゃんらしいですね」

「……今の、どっちですか」

「秘密」

「秘密です」

「まぁいいです」

思わず零れた笑い声が、風の中へ溶けていく。

世界はまだ不完全だった。

感情がある限り、人はきっとまた傷つく。

それでも、その痛みごと抱えて生きていくことを、リリウムはもう恐れていなかった。

隣には、大切な人たちがいる。

リリウムは静かに前を向き、色づいた世界へ歩き出した。